

2024 年度

徳島大学
高等教育研究センター
学修支援部門

国際教育推進班

紀要・年報

2024 年度 徳島大学高等教育研究センター 学修支援部門国際教育推進班 紀要・年報

目次

【紀要論文】

ブルガリア人研究者の徳島訪問からの洞察と示唆	1
エジプト高等教育における国際政策と日本留学経験者の役割	7
西洋の高等教育における留学生のカウンセリングと支援アプローチの再考	11

【年報】

外国人留学生への指導・相談関連	19
新入留学生に対するガイダンス	19
消防訓練	19
留学生のための就職支援	20
● 「留学生のための就職支援イベント・セミナー」	20
● 就職個別相談	22
● 「留学生就職意向動向調査」	22
留学生受け入れ及び支援に関する活動	23
● 渡日前入学許可制度	23
● 外国人学生のための進学説明会および日本留学フェア	24
● 国際展開推進シンポジウムの開催	27
● サマースクールの開催	29
● スプリングスクールの開催	30
● 主な活動	31
国際交流活動・イベント	32
留学生地域交流推進事業	32
● ① 「日本の高校で国際交流を体験しよう」 2024 年 9 月 24 日（水）実施	32
● ② 「徳島の観光・文化を知ろう」 2024 年 11 月 9 日（土）実施 2024 年 11 月 5 日（火）、8 日（金）事前指導	32
● ③ 「徳島の企業・産業を知ろう」 2025 年 2 月 12 日（水）実施	33
日本文化・企業見学旅行（姫路城）	33
日本文化・企業見学旅行（京都）	34
International Day	34
● Let's Enjoy Malaysian Foods and Learn Malaysian Culture and Language	34
● Let's Enjoy Indian Foods and Learn Indian Culture and Language	34

Global Lunch	35
● Global Lunch 蔵本	35
多文化体験交流会	36
新入留学生ウェルカムイベント	36
世界の料理	37
蔵本宿舍入居者のための交流会 Inter-Kafe-Kuramoto	38
その他の交流イベント	38
● 書道体験	38
● 和太鼓体験	39
学生サポーター	39
日本語教育 日本語研修（初級）コース	40
日本語研修（上級）コース	41
日本文化研究（後期）	42
総合日本語 Japanese Language Program	43
海外留学関連	46
高等教育研究センターによる海外留学プログラム・サポート	46
グローバル・パーソン集中プログラム（GRIP, Global Person Resources Intensive Program）	49
官民協働海外留学支援制度～トビタテ！留学 JAPAN ～	53
その他の留学支援	53
徳島大学外国人留学生在籍状況	54
学術交流協定校一覧	57
徳島大学国際教育関係組織体制	60
徳島大学高等教育研究センター規則	61
徳島大学高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班会議規則	67
徳島大学高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班運営スタッフ会議に関する申合せ	69
徳島大学高等教育研究センター日本語研修コース規則	70
高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班・国際課人員名簿	71

紀要論文

ブルガリア人研究者の徳島訪問からの洞察と示唆

Insights and Implications from a Bulgarian Researcher's Visit to Tokushima

カーテャ・マリノヴァ*
MARINOVA, Katya

坂田 浩**
SAKATA, Hiroshi

村上 敬一***
MURAKAMI, Keiichi

橋本 智**
HASHIMOTO, Satoshi

藤原 由紀子**
FUJIWARA, Yukiko

チャン ホアンナム**
TRAN, Hoang Nam

*ヴェリコ・タルノヴォ大学文献学部

**徳島大学高等教育研究センター

***徳島大学総合科学部

要旨：本稿は、ブルガリア人研究者が徳島大学と徳島県を訪問して得た知見と示唆を探求する。この訪問で、日本とブルガリアにおける日本語教育の教育法、構造、文化的な違いについての初期的なアイデアが浮き彫りになった。研究では、没入型環境や文化的統合、学習者のニーズに合わせた教育法が言語習得に与える影響を強調している。また、交換留学生と一般外国人居住者の学習目的の違いから、教育アプローチを多様な学習者のニーズに適応させる必要性がさらに示されている。さらに、ツールや国際交流プログラムを活用して、日本語教育のアクセシビリティや協力関係を向上させる機会についても検討している。これらの洞察をもとに、本稿では2つの共同研究プロジェクトを提案する。1つは日本とブルガリアの教育法を比較するもので、もう1つは徳島での地域密着型の言語と文化交流に焦点を当てるものだ。このプロジェクトは、教育フレームワークの発展や異文化理解の促進、徳島大学とブルガリアのヴェリコ・タルノヴォ大学間の学術的なつながりを強化することを目指している。本稿は、日本語教育や国際協力に関する議論を広げ、今後の研究やプログラム開発に向けた実行可能な提言を提供する。留学生の流動性は世界中の高等教育政策の重要な側面となっており、文化交流、経済成長、知識の共有に貢献しています。そこで、米国、ヨーロッパ、中国、日本の4つの主要地域における留学生政策の比較分析を実施した。留学生を引き付け、維持するためにこれらの地域がとっている多様なアプローチから、これら政策の戦略、課題、成果を考察した。

キーワード：日本語教育、異文化交流、教育方法の比較、地域密着型学習、国際共同研究

はじめに

ヴェリコ・タルノヴォ大学「聖キリルと聖メトデー」は、バルカン地域を代表する高等教育機関として広く知られている。国際化への取り組みにより、ヨーロッパ、アジアなど世界各地域とのパートナーシップが強化され、同大学の国際的な地位は大幅に向上している(H. Tran & Marinova, 2021; H. N. Tran & Marinova, 2022; VTU, 2020)。中でも注目すべき取り組みは、日本学の推進である。ヴェリコ・タルノヴォ大学は、日本語(Vassileva, 2005)、文化(Marinova, 2020)、歴史(H. Tran & Marinova, 2021)に関するプログラムを通じて、日本学分野で顕著な成果を上げている。また、共同研究プロジェクトや学術交流、文化イベントを通じて、バルカン地域と日本の相互理解を促進する重要な架け橋としての役割も果たし

ている(Holodovich, 2000; Petkova, 2015, 2016; 山口, 2019; 高橋, 2021)。

2022年以降、徳島大学とヴェリコ・タルノヴォ大学は学術パートナーとして提携し、共同研究や交流活動を積極的に展開している(H. Tran et al., 2023; H. Tran & Marinova, 2022)。これにより、両大学の国際的な学術卓越性に向けた共通の取り組みがさらに強化されている(ホアンナム et al., 2023)。本稿の第一著者は、最近徳島大学を訪問したヴェリコ・タルノヴォ大学の教員および研究者であり、徳島県内における大学レベルおよび民間の場での日本語教育に関する貴重な知見を提供した。この訪問は、「日本とブルガリアにおける日本語教育の比較研究」を目的とした研究プロジェクトの初の試みであり、日本とブルガリアにおける日本語教育の観察的比較を可能にし

た。

本稿の目的は、両国の日本語教育の構造的、教育的、文化的な違いを分析することである。さらに、徳島大学とヴェリコ・タルノヴォ大学との間での国際的な協力の機会を特定し、日本国内外での日本語教育の研究と発展を促進することを目指している。

徳島訪問中の経験

訪問中、第一著者は徳島大学の教職員と共同プログラム、学生交換イニシアティブ、協働活動について議論を交わした。また、徳島大学のキャンパスや国際学生向け施設を視察し、外国人学生が日本で言語習得を高めるためのユニークな没入型環境について理解を深めた。特に、大学の国際学生（専門的または学術的な習熟を目指す）と一般の外国人住民（主に日常的なコミュニケーションスキルを重視する）の目的の違いが注目された。この訪問は、異なるニーズに対応した教材と教育方法の適応の重要性を浮き彫りにし、文化的な没入体験が言語習熟における重要な要素であることを示している。



図1 徳島大学での研究打合せ

この初期調査を通じて、日本語教育におけるいくつかの重要な違いが観察された。例えば、日本ではネイティブスピーカーの存在により実践的な言語使用の機会が多い一方で、ブルガリアでは日本語学習者がネイティブスピーカーと直接触れる機会が限られ、実践的な応用が制約されている(H. Tran et al., 2023)。これらの観察結果を基に、本研究は両国における日本語教育環境の比較分析を正式に行い、没入体験、教育方法、地域社会との関わりが言語習得の成果に与える影響を探ることを目的としている。これらの要素を研究することで、本研究は徳島大学とヴェリコ・タルノヴォ大学の間での教育交流や言語プログラム開発のための協力枠組みを構築することを目指している。

徳島訪問で浮かび上がった研究課題と方向性

徳島への訪問で得られた経験は、異なる環境における日本語教育の実践的および文脈的な課題を明らかにし、上記で挙げた課題を探求するための基盤になった。徳島大学や民間の語学教室での観察から、教育目標や学習者のニーズに大きな違いがあることが分かり、さまざまな受講者に合わせた教育方法の重要性が浮き彫りになった。例えば、徳島大学の交換留学生は、専門的な学術知識を追求するために高度な日本語能力を目指す一方で、一般の学習者は日常生活での基本的なコミュニケーションスキルの習得を重視している。このことは、日本とブルガリアにおける日本語教育がこうした異なるニーズにどのように効果的に対応できるかという問いを投げかける。



図2 民間日本語クラスの様子

また、教育者や管理者との交流、徳島大学やTOPIA(徳島国際戦略センター, 2024)、(吉野川市国際交流協会, 2024)などの施設やリソースの観察を通じて、文化的没入体験や地域社会の支援が言語習得に果たす役割が強調された。ブルガリアではネイティブスピーカーとの接触が限られている一方(H. Tran et al., 2023)、徳島では学習者が現実の場面で日本語を使う機会が得られる。このことから、文化的な体験が流暢さに与える影響を探る必要があることが分かった。また、デジタル教材や教育リソースに関する議論では、特に遠隔地や国際的な学習者に対して技術を活用する可能性が強調され、デジタルツールが日本語教育の効率性とアクセス性をどのように向上させるかという問いが生まれた。

この訪問はさらに、仮想的および対面的な国際交流プログラムの利点と限界を明らかにし、これらの取り組みをどのように最適化して文化的および言語的な壁を克服できるかという課題を提示した。その一例として、GRIPプログラム(隆春 et al., 2021)が挙げられる。こうした洞察は、訪問中の直接観察や交流を通じて得られたものであり、教育的および文化的課題に取り組むための研究基盤を提供している。

ブルガリアの学者が徳島を訪問し、さまざまな関係者との議論を通じて、いくつかの研究課題が明らかになった。まず、日本とブルガリアにおける日本語教育の方法が流暢さを促進する効果においてどのように異なるのかを明確にする必要がある。また、文化的没入体験が交換留学生の言語習得を加速する上でどのような役割を果たすのかについても検討が求められる。さらに、デジタル教材が日本語学習の効率性とアクセス性をどのように向上させるかについての研究が重要である。加えて、非日本人学生が日本での生活に適應する際に直面する課題を明らかにし、それに対応する効果的な教育的アプローチを探る必要がある。最後に、オンラインと対面を併用したハイブリッド型の国際交流プログラムを設計する上でベストプラクティスを確立することが重要な研究テーマとして挙げられる。

徳島への学術訪問を通じて、さらに探求が必要な以下の研究方向性が明らかになった。まず、比較言語教育の観点から、日本とブルガリアにおける言語習得方法の違いに焦点を当て、多様な文脈で日本語学習者を指導する際の文化的影響を深く探る必要がある。また、国際交流プログラムの効果については、特に仮想交流が文化間の理解を促進する役割や、日本とヨーロッパ間で対面交流を推進する上で課題を検討することが求められる。さらに、文化統合が言語学習に与える役割については、没入型体験が言語能力にどのように影響を与えるかを調査し、文化活動と形式的な教育の相対的な価値を評価する必要がある。加えて、日本語教育のデジタル化に関しては、デジタルツールが言語習得に与える効果と、それらを従来の教室に統合する際の障壁を検討することが重要である。最後に、地域社会との統合においては、日本の小規模都市における外国人住民の社会的ダイナミクスを研究し、彼らの適應と統合を支援するために日本語教育をどのように適應させるべきかを探る必要がある。

これらの方向性は、徳島訪問で観察されたユニークな課題に対応するだけでなく、国際的な日本語教育の向上に向けた革新的な研究の可能性を提供している。上記の研究課題と方向性に対応するため、著者らはいくつかの共同研究計画を策定している。

共同研究計画案 1

ブルガリアと日本における日本語教育の比較研究は、両国の日本語教育における方法論、目的、課題、成果を分析し比較することを目的としている。この計画は、ベストプラクティスを特定し、ブルガリアと日本の教育者および教育機関に対

して潜在的な改善案を提案することを目指している。文化的、制度的、技術的要因の相互作用を調査することで、多様な文脈における日本語教育を向上させるための実践的な提言を提供する。

研究は、ブルガリアのヴェリコ・タルノヴォ大学と日本の徳島大学の協力のもと行われ、日本文部科学省 (MEXT)、ブルガリア教育科学省、国際交流基金などの組織から支援を受ける予定である。参加者には、両国の学生や教育者だけでなく、地域に根ざした日本語クラブや文化センターの代表者も含まれる。予算は 500 万円～800 万円と見積もられており、Erasmus+学術交流プログラム、国際交流基金 (JF)、MEXT、JICA、JST、または各機関の拠出金を通じて資金調達を目指している。

この研究では、以下のような主要な研究課題を探る。

ブルガリアと日本での日本語教育の教授法はどのように異なるのか。

両国の学生や教育者が直面する課題は何か。

文化的背景が教授および学習プロセスにどのように影響を与えているのか。

カリキュラムデザイン、教材、授業実践における主な共通点と相違点は何か。

この企画案では、質的および量的データ収集を組み合わせた混合研究アプローチを使用する予定である。日本語教育者や学生を対象とした構造化インタビューを通じて、教育方法や学習経験について詳細なデータを収集する。アンケート調査を通じて、学生の学習経験や教育方法の効果に対する認識を把握する。ブルガリアと日本の両国での授業観察を通じて、教育実践、教室のダイナミクス、学生のエンゲージメントに関する洞察を得る。また、シラバス、教科書、デジタル教材の比較分析を行い、学習目標、コース内容、評価方法について検討する。成功した教育実践を特定し、その事例を取り上げるケーススタディも行う予定である。さらに、参加者が異なる教育環境を体験できるように短期的な試行交流プログラムを実施する。

この研究の期待される成果には、以下のものが含まれる。日本とブルガリアにおける日本語教育の長所と短所の明確な理解。カリキュラム改善のための実践的な提案。査読付き学術誌への論文発表や、教育者向けのガイドブックの出版を通じた研究結果の発信。また、ブルガリアと日本の大学間の連携を強化するための提案。これには、共同教員研修ワークショップの実施、リソース共有、交流プログラムの拡充が含まれる。

この研究計画案は、両国において重要な意義を持つ。ブルガリアでは、文化的没入が限られた環境で日本語教育を適應させるための洞察を提供

し、学生をより効果的に支援できるようにする。日本では、アジア以外の地域からの国際学生を受け入れるための戦略を提供し、ブルガリアとの協力を通じて教育的な結びつきを強化する。このプロジェクトは、効果的な言語教育に関する国際的な議論に貢献し、文化的な境界を越えた教育システムを比較するための再現可能な枠組みを提供する。この研究を通じて、日本語教育の改善だけでなく、異文化理解と協力を促進することを目指している。

共同研究計画案 2

地域社会を基盤とした言語および文化交流プログラムの開発に関する研究は、外国人住民の地元日本社会への統合を強化すると同時に、相互文化理解を促進することを目的としている。このプロジェクトでは、徳島県で包括的なプログラムを開発し、実施する予定である。このプログラムは、言語教育と文化的没入活動を組み合わせ、地域社会のリソースと参加を活用することで、言語習得と社会統合の両方を支援することを目指している。更に、国際人口が増加している日本の他の地方地域にも適用可能なモデルとなることを目指している。

この取り組みの主な関係者には、徳島国際戦略センター (TOPIA)、吉野川市国際交流協会、地元のコミュニティリーダー、教育機関、徳島県内の外国人住民が含まれる。ボランティアグループ、地元企業、非政府組織もプログラム活動を促進し支援する上で重要な役割を果たす。予算は 800 万円～1000 万円と見積もられており、地方自治体の資金、地域スポンサーシップ、国際交流基金などの助成金を活用する予定である。

ブルガリアの研究者や関係者が地域社会を基盤とした言語および文化交流プログラムに関与することで、このプロジェクトに貴重な国際的視点をもたらし、異文化間の課題と機会をより深く理解することができる。日本語教育と文化研究を専門とするブルガリアの研究者は、日本の研究者と協力して、両国のベストプラクティスを取り入れたプログラムカリキュラムを設計することができる。彼らの専門知識は、ブルガリアの非没入型環境での言語教育の経験を活用し、多様な学習者のニーズに合わせた教授法を調整する上で重要な役割を果たす。ヴェリコ・タルノヴォ大学やブルガリアの文化組織は、徳島とブルガリアの参加者が文化的経験と言語学習の旅を共有するための仮想交流セッションを支援することができる。この協力には、ブルガリアと日本の学習者双方に役立つデジタルツールやリソースの開発も含まれる。これにより、プログラムの成果が異な

る文化的文脈に適応できるようになる。ブルガリアの研究者や関係者の積極的な参加を通じて、プログラムの効果を高めるだけでなく、ブルガリアと日本に強力な学術的および文化的な絆を築き、長期的な国際協力の基盤を形成することができる。

このプログラムは以下の目標を中心に据えている。外国人住民の日本語能力の向上、国際コミュニティと地域社会間の文化交流の促進、社会的結束の強化。年間 200 人の参加者（外国人住民と地域ボランティアを含む）を対象とし、50 人の地域住民を「文化大使」としてトレーニングし、プログラム活動を指導・支援する。

この目標を達成するために、プログラムは多面的なアプローチを採用する予定である。外国人住民の実践的なニーズに合わせた週次日本語クラスを提供し、日常生活のコミュニケーションスキルに重点を置く。このクラスには、徳島の伝統工芸や料理など、地域文化の要素が取り入れられ、学習を魅力的で文脈的に関連性のあるものにする。教室での指導に加え、毎月、阿波踊りのレッスン、茶道、伝統料理教室など、ハンズオンでの文化的没入体験を提供する文化ワークショップやコミュニティイベントを開催する予定である。これらの活動は、現実の状況での学習を強化するために構造化された言語練習セッションと組み合わせられる。また、外国人参加者と地域ボランティアをペアにするメンターシステムを確立し、買い物、公共交通機関の利用、医療制度の利用など、日本の生活の側面を案内しながら言語練習を支援する予定である。さらに、参加者が言語学習教材にアクセスし、イベントをスケジュールし、メンターと連絡を取ることができるアプリやオンラインプラットフォームなどのデジタルコンポーネントも導入する予定である。

プログラムの期待される成果には、外国人住民の日本語能力の向上、参加者と地域社会の両方における文化意識とエンゲージメントの向上、外国人住民と日本人住民間の社会的な絆の強化が含まれる。成功は、参加者の言語スキルの事前・事後評価、文化理解に関するアンケート調査、地域社会からのフィードバックを通じて測定される。

このプロジェクトの意義は非常に大きい。外国人住民にとっては、日本での生活に適応し、地域社会により効果的に統合される能力を向上させ、生活の質を向上させる。日本人住民にとっては、文化的多様性への理解を深め、よりグローバル化した社会に適応するためのスキルと開かれた姿勢を身につけることができる。また、このプログラムは、言語学習、文化交流、地域社会の統合を促進するための再現可能なモデルとして、日本の

他の地方都市や都市部においても適用可能なスケラブルな解決策を提供することが期待されている。

おわりに

徳島大学とその周辺地域への学術訪問は、日本語教育の微妙な側面とその文化的背景について貴重な洞察を提供した。この訪問では、日本のネイティブスピーカーが多い没入型環境とブルガリアの非没入型環境を比較することで、教育アプローチ、学習者の目標、文化的統合が言語習得に果たす役割の違いが明らかになった。観察と議論を通じて、多様な学習者のニーズに対応する教育方法を調整すること、デジタルツールを活用してアクセス可能性を高めること、国際交流を通じて異文化理解を促進することの重要性が強調された。

日本とブルガリアの日本語教育を比較する分析や、徳島での地域密着型言語と文化交流プログラムに焦点を当てた共同研究プロジェクトは、これらの課題に対処する具体的な方法を提供する。これらの取り組みは、徳島大学とヴェリコ・タルノヴォ大学の学術協力を深め、国際的な日本語教育の発展を促進することを目指している。また、文化的没入と地域社会の関与を言語プログラムに統合することで、言語習得と社会的結束を向上させる可能性も示されている。

この稿は、言語教育に関する進化する議論に貢献し、比較分析とプログラム開発のための実用的なフレームワークを提供する。学術的・文化的ギャップを埋めることで、今後の研究の基盤を築き、日本とブルガリア間のつながりを強化し、国際的な言語教育の発展に貢献することを目指している。

謝辞

本研究を進めるにあたり、多くのご支援とご協力をいただきました。徳島大学国際教育研究交流資金の寄付企業様に、そして訪問させていただいた大学や団体の関係者の皆様に感謝申し上げます。

参考資料

Holodovich, L. (2000). Japanese Studies in Bulgaria. *Japanese Studies around the World*, 93–100.
Marinova, K. (2020). Японски празници, посветени на децата. *Societas Classica*, 11(1), 208–217.
Petkova, G. (2015). Challenges and Perspectives: Japanese Studies in Bulgaria.

Japanese Studies around the World, 164–173.
Petkova, G. (2016). Promotion and Reception of Japanese Culture in Bulgaria. *Promotion and Reception of Japanese Culture in Bulgaria*. 1.
Tran, H., & Marinova, K. (2021). Experiences of Veliko Tarnovo University in Academic Exchange and Cooperation with Japan. *高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班紀要・年報*, 2020, 1–6. <https://repo.lib.tokushima-u.ac.jp/115853>
Tran, H., & Marinova, K. (2022). Students' Experience Two Years Into the Pandemic at a Bulgarian University. *The Paris Conference on Education 2022: Official Conference Proceedings*, 135–144. <https://doi.org/10.22492/issn.2758-0962.2022.12>
Tran, H., Marinova, K., & Nghiem, V. H. (2023). Exploring Perceived Speaking Skills, Motives, and Communication Needs of Undergraduate Students Studying Japanese Language. *Education Sciences*, 13(6). <https://doi.org/10.3390/educsci13060550>
Tran, H. N., & Marinova, K. (2022). Recruiting International Students and Internationalization Policies of Bulgarian Universities. *Tokushima University, International Office Bulletin*, 2021(December), 25–31.
Vassileva, M. (2005). ブルガリア人の日本語学習者における動機付けの種類. 第2回ブルガリア日本語学・日本語教育学シンポジウム、ソフィア市, 34–40.
VTU. (2020). Veliko Tarnovo University: Strategy for Internationalization 2020–2023. 1–7.
ホアンナムチャン, マリノヴァカーテヤ, ヴァシレヴァマグダレナ, & ミネヴァミリツァ. (2023). 日本とブルガリアの学術交流の可能性を探る. *高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班紀要・年報*, 1–11.
吉野川市国際交流協会. (2024). 日本語教室の運営. https://yia2020.net/?page_id=244
山口サトル. (2019). The Activities of Japanese-Language Specialists and the Spread of Japanese Culture in Bulgaria. *国際交流基金*. <https://www.jpj.go.jp/e/project/japanese/teach/dispatch/voice/voice/touou/bulgaria/2019/report01.html>
徳島国際戦略センター. (2024). 日本語教室のご

案 内 .
<https://www.topia.ne.jp/docs/2015080700014/>
隆春清藤, 智橋本, 浩坂田, モートン常慈, & ホ
アンナムチャン. (2021). 徳島大学 GRIP (第1期
生・第2期生) の実践報告: 新たな全学的なグロ
ーバル人材教育プログラム. 高等教育研究セン
ター学修支援部門国際教育推進班紀要・年報, 1-
10. <https://repo.lib.tokushima->

<https://www.topia.ne.jp/docs/2015080700014/>
u.ac.jp/ja/116848
高橋トモヤ. (2021). Japanese-Language
Specialist Activities and the Spread of
Japanese Culture in Bulgaria. 国際交流基金.
<https://www.jpff.go.jp/e/project/japanese/teach/dispatch/voice/voice/touou/bulgaria/2021/report01.html>

International Policies in Egyptian Higher Education and the Roles of Japan-Educated Graduates

エジプト高等教育における国際政策と日本留学経験者の役割

チャン ホアンナム*
TRAN, Hoang Nam

マクラード・アフメドシャウキーモハメド**
MAKLAD, Ahmed Shawky Mohamed

アブダッラー・アフメドアーミルマフムード***
ABDALLAH, Ahmed Alamir Mahmoud

金 成海*
JIN, Cheng-Hai

*Research Center for Higher Education, Tokushima University
徳島大学高等教育研究センター

**College of Computer Science and Engineering at Yanbu, Taibah University
タイバ大学ヤンブー校 コンピュータ科学・工学部

***Department of Basic Medical Sciences, Aqaba Medical Sciences University
アカバ医科学大学 基礎医学科学部

Abstract. This manuscript analyzes the international policies shaping higher education in Egypt, emphasizing their role in fostering global partnerships and academic excellence. Drawing insights from the potential contributions of Egyptian alumni of Tokushima University, the manuscript identifies key fields for academic cooperation, including information technology, medical research, engineering, social science, agricultural science, renewable energy etc. By analyzing Egypt's strategic approaches and leveraging the expertise of its graduates, the paper provides actionable recommendations for Japan to strengthen bilateral academic ties. These findings underscore the potential for collaborative research, knowledge exchange, and innovation to address shared challenges and drive mutual growth in the global academic arena.

要旨：本稿は、エジプトの高等教育を形成する国際政策を分析し、それらがグローバルなパートナーシップの促進と学術的卓越性の向上に果たす役割を強調する。徳島大学のエジプト人卒業生の役割に基づき、情報科学、医科学、理工学、社会科学、農学、再生可能エネルギーなどの主要な学術協力分野を特定する。エジプトの戦略的アプローチを分析し、その卒業生の専門知識を活用することで、日本が二国間の学術的連携を強化するための実践的な提言を示す。本研究の結果は、共同研究、知識交換、イノベーションの推進が共通の課題に取り組み、グローバルな学術領域における相互成長を促進する可能性を示唆している。

Keywords: International policies, higher education, academic cooperation, Egypt-Japan relations, alumni contributions, joint research initiatives.

Introduction

The rising internationalization of higher education is reshaping academic landscapes worldwide, with nations increasingly recognizing the value of global partnerships to foster innovation, economic growth, and cultural exchange. Japan has emerged as a leading advocate for international academic collaboration, emphasizing student mobility, joint research programs, and knowledge exchange (Tran & Jin, 2021). By hosting students and researchers from diverse backgrounds, Japanese institutions aim to address global challenges while enhancing their own educational frameworks (Huang, 2007; Knight, 2007; Yonezawa et al., 2014). The government's initiatives, such as the "Top Global University Project" launched in 2014, further underline Japan's commitment to fostering internationalization in higher education (MEXT, 2014).

Egypt has positioned itself as a significant player in higher education reform within the Middle East and North Africa (MENA) region, leveraging international collaborations to drive progress (Helal, 2016; Ministry of higher Education and Scientific research, 2019). Over the past decade, Egypt has actively pursued partnerships with global academic institutions, including those in Japan (JICA, 2016; MOFA, 2016). These efforts focus on addressing key national priorities such as agricultural sustainability, renewable energy, and advancements in medical sciences (UNESCO, 2020). Joint research initiatives and exchange programs have been pivotal in fostering a mutually beneficial relationship between the two nations, as highlighted in recent dynamics on Egypt-Japan partnerships (JICA, 2016; MOFA, 2016). Despite the evident strides in academic cooperation,

gaps in literature remain regarding the specific policies and contributions that enable such collaborations to flourish. Furthermore, the role of alumni as catalysts for sustained academic and cultural exchange is underexplored. This paper aims to fill these gaps by examining Egypt's international policies in higher education, analyzing the contributions of Egyptian alumni from Tokushima University, and providing actionable recommendations to strengthen bilateral ties between Egypt and Japan.

Egypt's International Policies in Higher Education

Egypt's higher education system has undergone significant reforms in recent decades to align with global standards and foster international collaboration. Key policy initiatives include:

1. **The National Strategy for Higher Education and Scientific Research 2030:** launched on 7/3/2023, this strategy emphasizes innovation, research excellence, and sustainable development (Ministry of Planning and Economic Development, 2023), prioritizing fields such as renewable energy, agricultural science, and information technology, raising the quality of education, scientific research, and its applications, preparing graduates for the labor market, innovation, entrepreneurship and building a knowledge economy, as well as to prepare a "higher education law" (Helal, 2016; Ministry of higher Education and Scientific research, 2019).
2. **Partnership Programs:** Egypt has actively sought bilateral agreements with countries like Japan to enhance academic exchange and collaborative research (JICA, 2016; MOFA, 2016).
3. **Scholarship Opportunities:** Government-funded scholarships, such as the "Missions Program," enable Egyptian students to pursue advanced degrees abroad, creating a pool of globally trained experts.

Alumni Contributions to Japan

International alumni who have studied in Japan, particularly at Tokushima University (Tran et al., 2023), have made significant achievements in bridging the academic and cultural ties between their countries and Japan. Their ability to integrate Japanese expertise with local knowledge has led to impactful research collaborations and innovations in fields like information technology and medical sciences (Tran & Maklad, 2024). Furthermore, these alumni serve as cultural ambassadors, fostering mutual understanding and laying the groundwork for sustained partnerships (JASSO, 2023). Their success stories underline the importance of alumni as catalysts for deeper academic

cooperation (Gonzalez, 2019).

Egyptian alumni of Tokushima University have played a pivotal role in strengthening academic cooperation between Egypt and Japan. Their contributions span multiple domains:

1. **Information Technology:** Joint efforts in developing smart systems and data analytics underscore the potential for innovation in digital transformation, pioneering techniques for super early disease and cancer detection and diagnosis using genetic and medical imaging technologies (Badawy et al., 2023; Baghdadi et al., 2022; Maklad et al., 2024, 2021).
2. **Medical Research:** Egyptian alumni have contributed to advancements in medical technologies and public health initiatives, facilitating knowledge transfer between the two nations. introducing integrative and prophetic medicine education at an Arabic medical school (Hamouda et al., 2019), developing nutritional supplements for better public prophylaxis and treatment of COVID-19 pandemic (Mohamed et al., 2022; Sayed et al., 2020).
3. **Agricultural Science:** Alumni have engaged in research collaborations addressing food security and sustainable agricultural practices, leveraging Japan's technological expertise.
4. **Renewable Energy:** Collaborative projects focusing on solar and wind energy solutions have emerged, aligning with Egypt's renewable energy goals.

Conceptual Framework

The conceptual framework for this study illustrates the interconnected elements that underpin the academic cooperation between Egypt and Japan (see Figure 1). At its core is the alignment of international policies in higher education, which facilitate bilateral agreements and the establishment of joint research initiatives. These agreements enable knowledge exchange and cultural understanding, forming the basis for sustainable partnerships. A key component of the framework is the role of Egyptian alumni, who act as bridges by integrating Japanese expertise into their home country's context. Their contributions not only foster innovation in fields like renewable energy and medical sciences but also enhance mutual understanding between the two nations. The framework highlights how these components collectively drive innovation and growth, emphasizing the importance of structured policies, active alumni networks, and collaborative research to address global challenges.

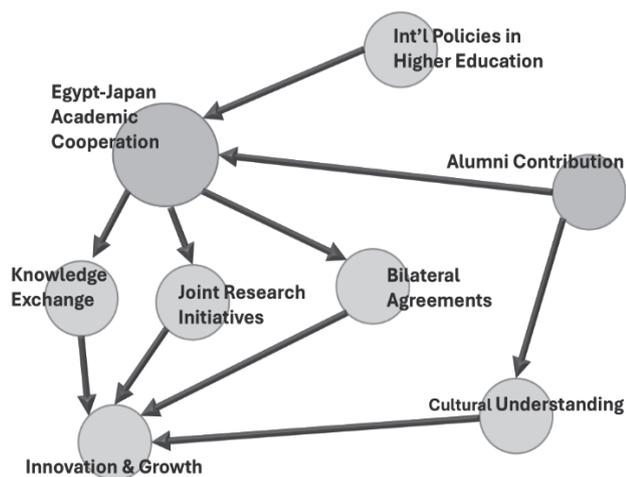


Figure 1. Conceptual Framework: Academic Cooperation and Alumni Network

Recommendations for Strengthening Academic Ties

To capitalize on these developments, based on the case of the Egyptian alumni network at Tokushima University, the universities in Japan and Egypt may consider the following strategies:

1. Leveraging Alumni Networks: Formalizing alumni associations to act as bridges for academic and cultural exchange between the two nations. Alumni networks should be involved in joint research activities, academic exchange, promoting scholarships and study abroad activities etc. via regular meetings and exchanges.
2. Enhancing Academic Exchange: Creating more opportunities for student- and faculty mobility through scholarships and exchange programs.
3. Expanding Joint Research Programs: Establishing dedicated funding mechanisms for collaborative research in priority areas such as IT/AI, biomedical sciences, agricultural and environmental technologies.
4. Policy Alignment: Encouraging policy dialogues to align national strategies on higher education and research priorities.

Conclusion

This manuscript highlights the pivotal role of international policies in fostering academic cooperation between Egypt and Japan. Alumni who have studied in Japan, particularly at institutions like Tokushima University, have been instrumental in bridging academic and cultural divides. Their contributions in areas such as medical sciences and information technology showcase the tangible benefits of joint research initiatives. Additionally, alumni networks serve as valuable platforms for sustained collaboration, fostering innovation and mutual understanding. Formal

agreements between Egypt and Japan, emphasizing joint research and student mobility, further enhance these collaborative efforts. These agreements not only align national priorities but also establish long-term frameworks for cooperation. By leveraging the expertise of alumni, fostering joint research initiatives, and maintaining strong bilateral agreements, both nations can address shared challenges, enhance knowledge exchange, and drive mutual growth in the global academic arena.

References

- Badawy, M., Balaha, H. M., Maklad, A. S., Almars, A. M., & Elhosseini, M. A. (2023). Revolutionizing Oral Cancer Detection: An Approach Using Aquila and Gorilla Algorithms Optimized Transfer Learning-Based CNNs. *Biomimetics*, 8(6). <https://doi.org/10.3390/biomimetics8060499>
- Baghdadi, N., Maklad, A. S., Malki, A., & Deif, M. A. (2022). Reliable Sarcoidosis Detection Using Chest X-rays with EfficientNets and Stain-Normalization Techniques. *Sensors*, 22(10). <https://doi.org/10.3390/s22103846>
- Gonzalez, M. C. C. (2019). *The Internationalization of Japanese Higher Education : A study of MEXT Scholars Alumni*. June 2019. <https://doi.org/10.13140/RG.2.2.36097.48487>
- Helal, H. (2016). *Egypt Education 2030 : “ Challenges , Opportunities & International Cooperation .”* 2030.
- Huang, F. (2007). Internationalisation of Higher Education in the Era of Globalisation. *Higher Education Management and Policy*, 19(1), 1–15. <https://doi.org/10.1787/hemp-v19-art3-en>
- JASSO. (2023). *Japan Alumni Global Network Newsletter*. February.
- JICA. (2016). *Egypt-Japan Education Partnership (EJEP)*. <https://www.jica.go.jp/Resource/egypt/english/activities/activity12.html>
- Knight, J. (2007). *Internationalization: Concepts, Complexities and Challenges BT - International Handbook of Higher Education* (J. J. F. Forest & P. G. Altbach (eds.); pp. 207–227). Springer Netherlands. https://doi.org/10.1007/978-1-4020-4012-2_11
- Maklad, A. S., Hashem, H., Matsuhiro, M., Suzuki, H., & Niki, N. (2021). Fully automatic bone segmentation through contrast enhanced torso CT dataset. *Proc.SPIE*, 11597, 115972G. <https://doi.org/10.1117/12.2582161>
- Maklad, A. S., Mahdy, M. A., Malki, A., Niki, N., & Mohamed, A. A. (2024). *Advancing Early Detection of Colorectal Adenomatous Polyps via Genetic Data Analysis: A Hybrid Machine Learning Approach*. 23–38. <https://doi.org/10.4236/jcc.2024.127003>

- MEXT. (2014). *Top Global University Project*. <https://www.mext.go.jp/en/policy/education/highered/title02/detail02/sdetail02/1395420.htm>
- Ministry of higher Education and Scientific research, E. (2019). National Strategy for Science, Technology and Innovation 2030. *Arab Republic of Egypt*, 2017–2020. <http://www.crci.sci.eg/wp-content/uploads/2019/12/National-Strategy-for-Science-Technology-and-Innovation-2030.pdf>
- Ministry of Planning and Economic Development. (2023). The National Agenda for Sustainable Development. *2030 Vision of Egypt*.
- MOFA. (2016). *Egypt-Japan Education Partnership "EJEP."* March, 1–4.
- Mohamed, S., Sayed, E., Ahmed, R. M. A. E., Mohamed, M., & Nabo, M. (2022). *Diabetic Center in King Fahd Hospital & Sayed Al-Shohada Primary Health Care Case Report TaibUVID nutritional supplements help rapid cure of COVID-19 infection and rapid reversion to negative nasopharyngeal swab PCR: for better public prophylaxis and treatment of COVID-19 pandemic*. March.
- Sayed, S., Bahashwan, S., Aboonq, M., Baghdadi, H., Elshzley, M., Okashah, A., Rashedy, A., Ahmed, R., Aljehani, Y., El-Tahlawi, R., Nabo, M., Hamouda, O., El-Murr, A.-R., Abdul-Latif, T., Mahmoud, H., Abu-Elnaga, M., & Hassan, M. (2020). Adjuvant TaibUVID nutritional supplements proved promising for novel safe COVID-19 public prophylaxis and treatment: enhancing immunity and decreasing morbidity period for better outcomes (A retrospective study). *International Journal of Medicine in Developing Countries*, 4(9), 1375–1389. <https://doi.org/10.24911/ijmdc.51-1594011487>
- Tran, H. N., & Jin, C. H. (2021). Factors Pulling International Students to Japan: A Situation Analysis. *The Asian Conference on Education 2021 Conference Proceedings*, 125–136. <https://doi.org/10.22492/issn.2186-5892.2022.10>
- Tran, H. N., Jin, C., Sakata, H., & Hashimoto, S. (2023). Fostering Global Partnership at Tokushima University: The Vital Role of Academic Agreements. *Bulletin of International Center, Tokushima University*, 12–18.
- Tran, H. N., & Maklad, A. S. M. (2024). Forging Educational Alliances: Saudi Arabia and Japan's Path to Excellence in Higher Education. *KCAH2024 Conference Proceedings*, 1, 321–330. <https://doi.org/10.22492/issn.2759-7571.2024.28>
- UNESCO. (2020). *Global Education Monitoring Report: Inclusion and education 2020 GEM Report*. UNESCO. <https://www.unesco.org/en/education/inclusion>
- Yonezawa, A., Kitamura, Y., Meerman, A., & Kuroda, K. (2014). *The Emergence of International Dimensions in East Asian Higher Education: Pursuing Regional and Global Development BT - Emerging International Dimensions in East Asian Higher Education* (A. Yonezawa, Y. Kitamura, A. Meerman, & K. Kuroda (eds.); pp. 1–13). Springer Netherlands. https://doi.org/10.1007/978-94-017-8822-9_1

Rethinking Counseling and Support Approaches for International Students in Western Higher Education

西洋の高等教育における留学生のカウンセリングと支援アプローチの再考

チャン ホアンナム*
TRAN, Hoang Nam

金 成海*
JIN, Cheng-Hai

*Research Center for Higher Education, Tokushima University
徳島大学高等教育研究センター

Abstract. This literature review aims to identify challenges faced by international students and evaluate the effectiveness of counseling and support strategies in Western higher education. Key findings highlight the importance of culturally sensitive approaches, peer mentorship programs, and institutional support systems in addressing cultural shock, acculturative stress, and financial insecurity. The findings have implications for Japan, where international students face similar barriers but within a distinct cultural and linguistic environment.

要旨：本稿は、文献レビューを通じて、西洋の高等教育における留学生が直面する課題を特定し、カウンセリングの有効性を評価することを目的とする。主要な結果として、カルチャーショック、適応ストレス、経済的不安を解決するために、文化的に配慮されたアプローチ、ピアメンタープログラム、および制度的支援システムの重要性を強調する。これらの知見は、日本の高等教育にも示唆を与える。

Keywords: International students, counseling, support, higher education, cultural adjustment, mental health.

Introduction

International students constitute a significant and growing demographic within higher education institutions worldwide, particularly in Western countries (Andrade, 2006). Their presence enriches academic environments through cultural diversity and global perspectives. However, this population faces unique challenges that may hinder their academic success and well-being, including cultural adjustment, language barriers, financial stress, discrimination, and social isolation (Constantine et al., 2005; Heng, 2018). Such challenges can lead to mental health issues, including anxiety, depression, and identity confusion, further complicating their transition and integration processes (Berry, 2006; Mori, 2000).

Cultural shock is among the most widely recognized issues, especially for students from collectivist cultures adjusting to individualistic societal norms in host countries (Yan & Berliner, 2011). Similarly, language barriers often exacerbate academic stress, limiting students' ability to participate fully in academic and social settings (Robertson et al., 2000; Smith & Khawaja, 2011). Financial stress due to high tuition fees and limited access to employment opportunities can further compound their challenges, affecting both their academic focus and mental health (McCloud & Bann, 2019). Moreover, experiences of discrimination and social isolation often leave international students feeling excluded and undervalued, negatively impacting their self-esteem and sense of belonging (Hanassab, 2006; Lee & Rice, 2007).

In response to these challenges, counseling interventions have become crucial in supporting

international students' academic and personal development. Research highlights the effectiveness of culturally sensitive counseling, peer mentorship programs, and institutional support systems in mitigating the adverse effects of cultural shock, language barriers, and discrimination (Glass & Westmont, 2014; Yeh & Inose, 2003). Institutions that proactively implement such support measures report better outcomes in terms of student retention, mental health, and academic performance (Leask, 2009; Marginson et al., 2010).

This manuscript aims to review the existing literature on the challenges faced by international students in Western higher education and to evaluate the effectiveness of counseling interventions designed to address these issues. Specifically, the objectives are to:

- Identify common psychological, academic, and social challenges experienced by international students.
- Examine the role of counseling strategies, such as culturally sensitive approaches, peer mentorship, and institutional initiatives, in supporting international students.
- Highlight gaps in existing research, future directions, and implications for Japan's higher education.

By synthesizing highlights from prior studies, this review seeks to provide an understanding of effective interventions and recommend the development of more inclusive and supportive environments for international students in higher education.

Methodology

This review focuses on journal articles, case studies, and empirical research published between 1999 and 2024. Databases such as Google Scholar, PubMed, PsycINFO, and ERIC were searched using keywords such as "international students," "foreign students," "counseling," "mental health," and "higher education." Studies were included if they documented specific cases of international students facing academic or emotional challenges and described counseling interventions or support strategies.

Literature Review

Cultural Shock and Adjustment Difficulties

A study documented the experiences of Chinese international students in the U.S., highlighting the challenges they faced due to cultural shock (Yan & Berliner, 2011). The study found that students often struggled with differences in communication styles, academic expectations, and social norms, which led to feelings of isolation and stress. Students sometimes experienced severe anxiety and depression due to the pressure to adapt to the individualistic culture of the host country. This emphasized the importance of culturally sensitive counseling and peer support in helping students navigate these challenges. This aligns with the theory that cultural shock often arises from the disparity between the individual's home culture and the host culture, particularly in terms of social norms and expectations (Ward & Kennedy, 1999). Cultural shock is a common challenge, particularly for students from collectivist cultures. A research on acculturation stress underscores that individuals navigating a new cultural environment often experience psychological distress, including anxiety, depression, and a sense of identity confusion (Berry, 2006). Counseling interventions that incorporate cultural validation and peer support have been shown to be effective in easing the transition. For instance, a study found that international students who participated in culturally tailored support groups reported lower levels of stress and higher levels of social connectedness (Yeh & Inose, 2003). Peer mentorship programs have proven beneficial in providing practical guidance and emotional support, helping students navigate academic and social challenges (Glass & Westmont, 2014). These studies suggest that a combination of professional counseling and peer-based interventions can significantly mitigate the adverse effects of cultural shock and foster a smoother adjustment process.

It is important to recognize the role of institutional support in addressing cultural shock. Universities that offer orientation programs, intercultural workshops, and access to mental health resources tailored to international students can play a pivotal role in reducing adjustment difficulties. For example, a study found that institutions with comprehensive support systems, including language assistance and

cultural integration activities, reported higher retention rates and better academic outcomes among international students (Andrade, 2006). Furthermore, the use of technology, such as virtual support groups and online counseling platforms, has emerged as a valuable tool in providing accessible and timely assistance to students experiencing cultural shock (Sherry et al., 2010).

Language Barriers and Academic Pressure

Studies have reported about international students in the U.K. who faced language barriers and academic stress (Mori, 2000). The inability to fully comprehend lectures and participate in discussions led to feelings of inadequacy and anxiety. Counseling focused on academic skill-building and language support helped the students improve their performance and self-esteem. Another source highlighted that international students often struggle with academic writing, listening comprehension, and verbal communication, which can hinder their academic progress and contribute to stress (Sawir et al., 2008). Similarly, language barriers often lead to social isolation and reduced participation in classroom activities, further compounding academic pressure were reported among international students in Australia (Robertson et al., 2000). Language barriers often exacerbate academic pressure, particularly for students studying in a second language. Language proficiency is a critical factor in academic success, as it affects students' ability to understand course material, complete assignments, and engage in discussions (Andrade, 2006). Counseling that integrates academic support and language training has been shown to mitigate these challenges. For example, a study found that international students who participated in English for Academic Purposes (EAP) programs reported significant improvements in their academic performance and confidence (Ryan & Carroll, 2005). Additionally, students who received targeted language support, such as tutoring and workshops on academic writing, were better equipped to handle the demands of their coursework (Smith & Khawaja, 2011).

Beyond language barriers, academic pressure can also stem from differences in educational systems and expectations. It was reported that international students often struggle to adapt to new teaching styles, assessment methods, and academic norms, which can lead to feelings of confusion and inadequacy (Zhou et al., 2008). To address these challenges, universities can implement orientation programs that familiarize students with the academic culture of the host country. For instance, conducting pre-session courses that combine language training with academic skill development, such as critical thinking and time management could be effective (Leask, 2009). Moreover, the role of peer support should be emphasized. Peer mentorship programs, where domestic students assist international students in

navigating academic and social challenges, can significantly reduce stress and improve academic outcomes (Glass & Westmont, 2014). Similarly, it is important to create inclusive classroom environments where international students feel encouraged to participate and ask questions without fear of judgment (Sherry et al., 2010).

Universities can also leverage technology to support students facing language barriers and academic pressure. A study found that online platforms offering language exercises, virtual tutoring, and academic resources can provide flexible and accessible support for international students (Osipov et al., 2015). Additionally, using multimedia tools, such as recorded lectures and interactive language apps, can enhance students' comprehension and engagement (Heng, 2018).

Discrimination and Social Isolation

International students in the U.S. may face racial discrimination and social isolation (Constantine et al., 2005). The experiences of microaggressions and exclusion led to severe anxiety and withdrawal. Group counseling and cultural awareness workshops for the students' peers were implemented to foster a more inclusive environment. Studies on the experiences of international students in the U.S. found that many faced discrimination based on their ethnicity, accent, or cultural background (Lee & Rice, 2007). Similarly, students from non-Western countries often encounter stereotypes and prejudice, which can lead to feelings of alienation and marginalization (Hanassab, 2006).

Discrimination and isolation are significant stressors for international students, often exacerbating mental health challenges such as anxiety, depression, and low self-esteem. International students from visibly different ethnic or cultural backgrounds are particularly vulnerable to discrimination, which can manifest as overt racism, microaggressions, or exclusion from social and academic activities (Smith & Khawaja, 2011). Counseling that addresses both individual and institutional factors is crucial for creating inclusive environments. For example, it was found that students who participated in culturally sensitive counseling reported reduced feelings of isolation and improved coping strategies (Yakunina et al., 2013). Additionally, peer support programs can foster a sense of belonging and reducing the impact of discrimination (Glass & Westmont, 2014).

Institutional policies and practices play a critical role in addressing discrimination and promoting inclusivity. Universities must actively combat discrimination by implementing anti-racism policies, providing diversity training for staff and students, and creating safe spaces for marginalized groups (Andrade, 2006). Intercultural workshops can bring together domestic and international students to challenge

stereotypes and build mutual understanding (Leask, 2009). Similarly, it was reported that universities with strong support systems, such as international student offices and multicultural centers, were better equipped to address the needs of students facing discrimination (Sherry et al., 2010). The role of faculty and staff in creating inclusive environments cannot be overlooked. Educators must be trained to recognize and address microaggressions in the classroom, as these subtle forms of discrimination can have a profound impact on students' academic and emotional well-being (Harrison & Peacock, 2010). Additionally, faculty who actively engage with international students and encourage their participation in class discussions can help reduce feelings of isolation and foster a more inclusive academic environment (Montgomery & McDowell, 2009).

Beyond institutional efforts, community and peer support are essential in combating discrimination and social isolation. Student-led initiatives, such as cultural clubs and peer mentorship programs can provide international students with a sense of community and belonging (Heng, 2018). Similarly, students who participated in support groups with peers from similar cultural backgrounds reported lower levels of stress and higher levels of social connectedness (Yeh & Inose, 2003).

Addressing discrimination and social isolation requires long-term, systemic changes. Universities may adopt an acculturation framework that promotes mutual adaptation between international students and the host community (Berry, 2006). This includes fostering intercultural competence among domestic students and staff, as well as providing international students with the tools to navigate cultural differences. Additionally, creating opportunities for meaningful interactions between domestic and international students, such as collaborative projects and social events is important to break down barriers and build empathy (Ward & Kennedy, 1999).

Financial Stress and Mental Health

A study examined international students in UK who faced financial instability while pursuing a degree. The students' financial stress contributed to chronic anxiety and difficulty concentrating (McCloud & Bann, 2019). Counseling interventions included financial planning support and stress management techniques, which helped the student regain focus and academic motivation. International students often struggle with the high costs of tuition, accommodation, and living expenses, which can lead to significant financial strain. Similarly, the experiences of Chinese international students in the U.S. showed that financial stress often exacerbates mental health issues such as anxiety, depression, and sleep disturbances (Zhai, 2004). Financial stress is a pervasive issue for many international students, particularly those from low- and

middle-income countries. Research emphasizes that financial difficulties can hinder students' ability to focus on their studies, participate in extracurricular activities, and maintain a healthy work-life balance (Sherry et al., 2010). Counseling that incorporates practical support, such as financial planning, budgeting workshops, and access to scholarships can alleviate mental health challenges. For example, it was reported that students who received financial literacy training reported reduced stress levels and improved academic performance (Andrade, 2006). Additionally, financial stress is often compounded by the inability to work due to visa restrictions, making it essential for universities to provide targeted support for international students (Smith & Khawaja, 2011).

Beyond individual counseling, institutional support plays a crucial role in addressing financial stress. Universities should offer comprehensive financial aid packages, including tuition waivers, stipends, and emergency funds, to support international students (Forbes-Mewett et al., 2010). Studies highlighted the success of universities that provide on-campus employment opportunities for international students, allowing them to earn income while gaining valuable work experience (Forbes - Mewett et al., 2010; Marginson et al., 2010).

Cultural and familial expectations also can play a role. Many international students feel immense pressure to succeed academically due to the financial sacrifices made by their families (Yan & Berliner, 2011). This pressure can lead to burnout and mental health challenges, particularly when combined with financial instability. To address this, counseling services can incorporate culturally sensitive approaches that acknowledge the unique pressures faced by international students (Yeh & Inose, 2003).

Peer support programs can also play a vital role in alleviating financial stress. It was demonstrated that peer mentorship programs, where senior students provide guidance on budgeting and navigating financial challenges, can significantly reduce stress and improve students' financial literacy (Glass & Westmont, 2014). Similarly, creating student-led initiatives, such as financial support groups and resource-sharing networks, is essential to foster a sense of community and mutual aid (Heng, 2018).

Addressing financial stress requires long-term, systemic changes. Universities may adopt a holistic approach to supporting international students, including partnerships with governments and private organizations to increase funding opportunities (Berry, 2006). Pre-departure financial planning workshops can be provided to help students prepare for the costs of studying abroad (Ward & Kennedy, 1999).

Figure 1 visualizes the findings about interconnected challenges faced by international students and their cumulative impact on well-being and academic success.

Key findings highlight four domains: cultural adjustment, language barriers, discrimination, and financial stress. Cultural adjustment and shock often arise from disparities between home and host cultures, resulting in identity confusion and psychological distress (Berry, 2006; Yan & Berliner, 2011). Language barriers, including difficulties in academic writing and communication, exacerbate academic pressure and hinder social integration (Robertson et al., 2000; Smith & Khawaja, 2011). Discrimination and social isolation negatively affect students' self-esteem and sense of belonging, leading to mental health challenges such as anxiety and depression (Hanassab, 2006; Lee & Rice, 2007). Financial stress, stemming from high tuition costs and limited employment opportunities, further compounds these issues, affecting students' focus and overall well-being (McCloud & Bann, 2019). Addressing these interconnected challenges through culturally sensitive counseling, peer support, and institutional initiatives can significantly enhance students' resilience and success.

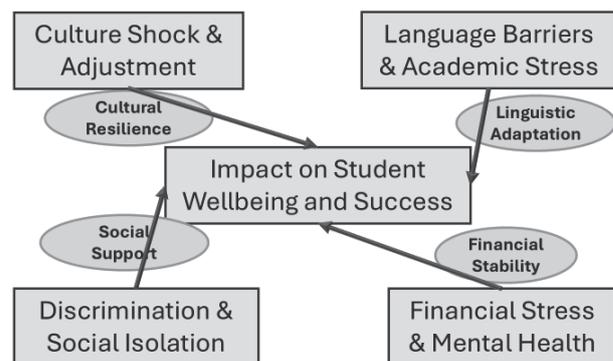


Figure 1. Conceptual Representation of Challenges (by the authors)

Discussion

This literature review highlights the unique challenges faced by international students in Western higher education and the critical role of counseling interventions in addressing these challenges. By synthesizing findings from diverse studies, this research underscores the multifaceted nature of issues such as cultural adjustment, language barriers, financial stress, discrimination, and social isolation, which can significantly impact the academic performance and mental health of international students (Andrade, 2006; Berry, 2006; Smith & Khawaja, 2011).

Figure 2 shows the conceptual framework proposed to illustrate the interconnected relationships between the challenges faced by international students, the interventions designed to address them, and the resulting outcomes on student well-being and academic success. International students encounter diverse challenges, including cultural adjustment, language barriers, discrimination, financial stress, and social isolation (Andrade, 2006; Heng, 2018). Counseling

interventions, such as culturally sensitive support, peer mentorship, and group counseling, directly address these issues by providing targeted assistance and promoting resilience (Glass & Westmont, 2014; Yeh & Inose, 2003). Institutional support mechanisms, such as orientation programs, multilingual counseling, and financial aid, further enable students to navigate their academic and social environments effectively (Leask, 2009; Sherry et al., 2010). Together, these interventions foster improved mental health, social connectedness, and academic performance (Berry, 2006; Smith & Khawaja, 2011). The framework emphasizes a holistic approach, integrating individual, peer-based, and systemic strategies to create a supportive and inclusive environment for international students.

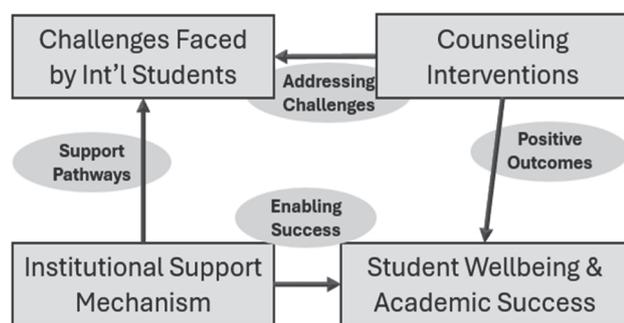


Figure 2. Conceptual Model of Counseling and Institutional Support for International Students (by the authors)

This study contributes to the growing body of literature on international education by focusing on counseling strategies tailored to the diverse needs of international students. The findings provide valuable insights into culturally sensitive interventions and institutional support mechanisms that enhance students' well-being and academic success. The research emphasizes the interconnectedness of mental health and academic outcomes, aligning with global priorities for inclusive education (Heng, 2018; Lee & Rice, 2007).

Japan, as a leading destination for international students in Asia (Tran & Jin, 2022b), faces similar challenges as identified in Western contexts, such as acculturation difficulties, language barriers, and social integration issues (Yonezawa, 2020, 2023). However, Japan's distinct cultural and linguistic environment

amplifies these challenges, necessitating tailored approaches (Tran & Jin, 2022a). For example, while peer mentorship programs have proven effective in Western settings (Glass & Westmont, 2014), in Japan, such initiatives could integrate language exchange and intercultural dialogue to enhance mutual understanding between domestic and international students (Tran et al., 2022). Furthermore, counseling services in Japan should prioritize multilingual support and culturally informed practices to address the unique needs of diverse student populations.

Future studies should explore the intersectionality of challenges faced by international students, considering how factors such as gender, ethnicity, and socio-economic status influence their experiences. Longitudinal studies are needed to assess the long-term impact of counseling interventions on academic and personal outcomes. Given the rise of digital tools, research should also investigate the effectiveness of technology-driven solutions, such as virtual counseling platforms and AI-powered language support, in overcoming barriers faced by international students (Wong et al., 2019).

Several limitations must be acknowledged. The focus on studies published in English may overlook information from non-English literature. Additionally, the emphasis on Western higher education contexts limits the generalizability to other regions, such as Asia or Africa. Finally, the reliance on existing empirical research constrains the ability to identify emerging trends or innovative practices not yet documented in the literature.

Conclusion

Addressing the challenges faced by international students requires a holistic, systemic approach that integrates individual, institutional, and policy-level interventions. This research underscores the importance of culturally sensitive counseling, peer mentorship, and institutional support in fostering inclusive and supportive environments for international students. By adapting and expanding these strategies, particularly in non-Western contexts such as Japan, educational institutions can better support the diverse needs of international students and contribute to their academic and personal success.

References

- Andrade, M. S. (2006). International students in English-speaking universities: Adjustment factors. *Journal of Research in International Education*, 5(2), 131–154. <https://doi.org/10.1177/1475240906065589>
- Berry, J. W. (2006). Acculturative stress. In *Handbook of multicultural perspectives on stress and coping*. (pp. 287–298). Springer Publications. <https://doi.org/10.1007/0-387->

26238-5_12

- Constantine, M. G., Kindaichi, M., Okazaki, S., Gainor, K. A., & Baden, A. L. (2005). A Qualitative Investigation of the Cultural Adjustment Experiences of Asian International College Women. In *Cultural Diversity & Ethnic Minority Psychology* (Vol. 11, Issue 2, pp. 162–175). Educational Publishing Foundation. <https://doi.org/10.1037/1099-9809.11.2.162>

- Forbes-Mewett, H., Nyland, C., & Shao, S. (2010). International student security: a view from Beijing. *International Studies in Sociology of Education*, 20(4), 355–373. <https://doi.org/10.1080/09620214.2010.530876>
- Glass, C. R., & Westmont, C. M. (2014). Comparative effects of belongingness on the academic success and cross-cultural interactions of domestic and international students. *International Journal of Intercultural Relations*, 38, 106–119. <https://doi.org/https://doi.org/10.1016/j.ijintrel.2013.04.004>
- Hanassab, S. (2006). Diversity, International Students, and Perceived Discrimination: Implications for Educators and Counselors. *Journal of Studies in International Education*, 10(2), 157–172. <https://doi.org/10.1177/1028315305283051>
- Harrison, N., & Peacock, N. (2010). Cultural distance, mindfulness and passive xenophobia: Using Integrated Threat Theory to explore home higher education students' perspectives on "internationalisation at home." *British Educational Research Journal*, 36(6), 877–902. <https://doi.org/10.1080/01411920903191047>
- Heng, T. T. (2018). Different is not deficient: contradicting stereotypes of Chinese international students in US higher education. *Studies in Higher Education*, 43(1), 22–36. <https://doi.org/10.1080/03075079.2016.1152466>
- Leask, B. (2009). Using Formal and Informal Curricula to Improve Interactions Between Home and International Students. *Journal of Studies in International Education*, 13(2), 205–221. <https://doi.org/10.1177/1028315308329786>
- Lee, J. J., & Rice, C. (2007). Welcome to America? International student perceptions of discrimination. *Higher Education*, 53(3), 381–409. <https://doi.org/10.1007/s10734-005-4508-3>
- Marginson, S., Nyland, C., Sawir, E., & Forbes-Mewett, H. (2010). *International Student Security*. Cambridge University Press. <https://doi.org/DOI:10.1017/CBO9780511751011>
- McCloud, T., & Bann, D. (2019). Financial stress and mental health among higher education students in the UK up to 2018: rapid review of evidence. *Journal of Epidemiology & Community Health*, 73(10), 977–984. <https://doi.org/10.1136/jech-2019-212154>
- Montgomery, C., & McDowell, L. (2009). Social Networks and the International Student Experience: An International Community of Practice? *Journal of Studies in International Education*, 13(4), 455–466. <https://doi.org/10.1177/1028315308321994>
- Mori, S. C. (2000). Addressing the Mental Health Concerns of International Students. *Journal of Counseling & Development*, 78(2), 137–144. <https://doi.org/https://doi.org/10.1002/j.1556-6676.2000.tb02571.x>
- Osipov, I. V., Praskova, A. Y., & Volinsky, A. A. (2015). *Real Time Collaborative Platform for Learning and Teaching Foreign Languages*. <https://arxiv.org/abs/1501.04155>
- Robertson, M., Line, M., Jones, S., & Thomas, S. (2000). International Students, Learning Environments and Perceptions: A case study using the Delphi technique. *Higher Education Research & Development*, 19(1), 89–102. <https://doi.org/10.1080/07294360050020499>
- Ryan, J. M., & Carroll, J. (2005). "Canaries in the coalmine": international students in Western universities. In J. Carroll & J. Ryan (Eds.), *Teaching International Students. Improving learning for all* (pp. 1–10). Routledge.
- Sawir, E., Marginson, S., Deumert, A., Nyland, C., & Ramia, G. (2008). Loneliness and International Students: An Australian Study. *Journal of Studies in International Education*, 12(2), 148–180. <https://doi.org/10.1177/1028315307299699>
- Sherry, M., Peter, T., & Wing, H. C. (2010). International students: a vulnerable student population. *High Educ*, 60, 33–46. <https://doi.org/10.1007/s10734-009-9284-z>
- Smith, R. A., & Khawaja, N. G. (2011). A review of the acculturation experiences of international students. *International Journal of Intercultural Relations*, 35(6), 699–713. <https://doi.org/https://doi.org/10.1016/j.ijintrel.2011.08.004>
- Tran, H., Inosaki, A., & Jin, C.-H. (2022). On Campus Support and Satisfaction of International Students: A Review of Japanese Literature. *The IAFOR Conference on Educational Research & Innovation: 2022 Conference Proceedings*, 1(1), 1–16.
- Tran, H., & Jin, C.-H. (2022a). Challenges in Attracting International Students to Japan. *Educational Alternatives*, 20(1), 11–25.

- Tran, H., & Jin, C.-H. (2022b). Factors Pulling International Students to Japan: A Situation Analysis. *The Asian Conference on Education 2021: Official Conference Proceedings*, 125–136. <https://doi.org/10.22492/issn.2186-5892.2022.10>
- Ward, C., & Kennedy, A. (1999). The measurement of sociocultural adaptation. *International Journal of Intercultural Relations*, 23(4), 659–677. [https://doi.org/https://doi.org/10.1016/S0147-1767\(99\)00014-0](https://doi.org/https://doi.org/10.1016/S0147-1767(99)00014-0)
- Wong, J., Baars, M., Davis, D., Van Der Zee, T., Houben, G.-J., & Paas, F. (2019). Supporting Self-Regulated Learning in Online Learning Environments and MOOCs: A Systematic Review. *International Journal of Human-Computer Interaction*, 35(4–5), 356–373. <https://doi.org/10.1080/10447318.2018.1543084>
- Yakunina, E. S., Weigold, I. K., Weigold, A., Hercegovac, S., & Elsayed, N. (2013). International Students' Personal and Multicultural Strengths: Reducing Acculturative Stress and Promoting Adjustment. *Journal of Counseling & Development*, 91(2), 216–223. <https://doi.org/https://doi.org/10.1002/j.1556-6676.2013.00088.x>
- Yan, K., & Berliner, D. C. (2011). Chinese international students in the United States: demographic trends, motivations, acculturation features and adjustment challenges. *Asia Pacific Education Review*, 12(2), 173–184. <https://doi.org/10.1007/s12564-010-9117-x>
- Yeh, C. J., & Inose, M. (2003). International students' reported English fluency, social support satisfaction, and social connectedness as predictors of acculturative stress. *Counselling Psychology Quarterly*, 16(1), 15–28. <https://doi.org/10.1080/0951507031000114058>
- Yonezawa, A. (2020). Challenges of the Japanese higher education Amidst population decline and globalization. *Globalisation, Societies and Education*, 18(1), 43–52. <https://doi.org/10.1080/14767724.2019.1690085>
- Yonezawa, A. (2023). Japan's Higher Education Policies under Global Challenges. *Asian Economic Policy Review*, 18(2), 220–237. <https://doi.org/DOI:10.1111/aepr.12421>,
- Zhai, L. (2004). Studying International Students: Adjustment Issues and Social Support. *Journal of International Agricultural and Extension Education*, 11(1). <https://doi.org/10.5191/jiaee.2004.11111>
- Zhou, Y., Jindal-Snape, D., Topping, K., & Todman, J. (2008). Theoretical models of culture shock and adaptation in international students in higher education. *Studies in Higher Education*, 33(1), 63–75. <https://doi.org/10.1080/03075070701794833>

年報

外国人留学生への指導・相談関連

本学に在籍中の留学生だけでなく、留学生の家族、外国人研究者及び学外の徳島大学に入学を希望する留学生を対象とした指導・相談を、常三島地区の「国際教育推進班・国際課」と蔵本地区の「国際交流室・国際課蔵本分室」の二か所で行っている。面談、オンライン、電話、メールの形式で日本語、中国語、英語、韓国語、ベトナム語の五ヶ国語で対応できる体制が整っており、メンタルヘルスに関するカウンセリングが必要な場合は、キャンパスライフ健康支援センター及び専門医と連携することで対応している。

相談内容で最も多いのは、一般的な進学・修学、授業料・奨学金、住居、生活、日本での就職などであるが、他機関・学内関係部局及び関係者と連携しながら対応しないと解決できない内容（例えば、窃盗事件、交通事故、家賃未納（不納）、不動産のトラブル、メンタルヘルスなどに関するもの）もあり、これら比較的複雑な相談に対しても対応している。特に、近い将来必ず発生すると言われている南海トラフ巨大地震への備えとして、緊急地震速報の内容や地震発生の際の避難方法について詳しく説明を行っている。

今年は特に、新型コロナ禍の中、感染対策、日常生活の中で対応する方法について学生たちに情報提供を行った。

新入留学生に対するガイダンス

新入留学生ガイダンスは、本学に入学した留学生に対し、修学・生活に関する指導を行い、留学生生活の円滑化を図ることを目的として、年2回（前期及び後期）常三島・蔵本キャンパスで開催しているものである。2024年度前期ガイダンスは、4月16日（火）に蔵本地区、4月19日（金）に常三島地区で開催、計41名が参加した。ガイダンスでは、教員による説明に加え、徳島中央警察署の講師が防災対策や交通安全、110番通報の方法などについて詳しく解説した。ガイダンス終了後には、徳島地域留学生交流推進協議会の協力機関から寄贈された食料品や日用品を、希望する留学生に配付した。



ガイダンスでは、インターナショナルオフィス教員から、学生生活や日本での日常生活に関する注意事項について説明があった。後期ガイダンスは、10月23日（水）に蔵本地区、10月24日（木）に常三島地区で開催。計34名が参加した。ガイダンスでは、高橋副学長からの挨拶の後、徳島中央警察署からお越しいただいた講師の方から、交通安全、防犯、生活安全等の日本での生活における安全上の留意点についてお話しいただいた。その後、教員から、在留資格や奨学金等の日本での生活に関わる注意事項について説明があった。前期と同様に、ガイダンス終了後には、徳島地域留学生交流推進協議会の関係機関から寄付された食料品や日用品等を希望者に配付した。



消防訓練

11月14日（木）に常三島地区で消防訓練を行った。本訓練は、外国人留学生の防火に関する意識や消防対策スキルの向上を目的として実施した。徳島市消防局より、日本の火災事情、予防方法、および発生時の対応について説明を受けた。その後、119番通報訓練を実施し、助任の丘では訓練用の消火器を使った消火訓練を行った。当日、13名の留学生が参加した。



留学生のための就職支援

● 「留学生のための就職支援イベント・セミナー」

昨年度は「留学生のための就職支援イベント・セミナー」と「留学生県内定着促進事業」を共同開催する形でセミナーを行ったが、今年度は同事業が中止となったため、基本的には就職支援セミナーを中心に支援を提供した。ただ、第7回イベント「県内企業訪問」に関しては、徳島県が主催する「留学生地域交流推進事業」の支援を受ける形で実施した。

今回は7回のイベント・セミナーに加え、「県内企業インターンシップ」（於大塚製薬）、「ニトリ会社説明会」、ならびに特別セミナー「日本におけるこれからのIT産業とその動向」、「マイナビ・リクナビの使い方を学ぼう」を加えた計10回で事業を展開した。今年度も、基本的にはほとんどのセミナー・イベントを対面で実施することし、オンラインでの実施は、外部からの講師にオンラインで講義を提供してもらうイベントのみに限定した。

参加合計人数は103名。開催した日付、タイトル、参加人数は次のとおり。

留学生のための就職支援イベント・セミナー	徳島大学	他大学	不明	総計
第1回「日本の就活・就職について学ぼう」5/10	11	1		12
第2回「日本語面接への対策とビジネスマナーを学ぼう」6/21	7	1		8
第3回「ジョブフェア&交流会」7/12	11	5		16
第4回「卒業生の就活・就職体験を聞こう」10/11	4	2	1	7
第5回「就労ビザについて学ぼう」12/13	7			7
第6回「就職合同説明会について学ぼう」2/7	4			4
第7回「県内企業訪問」2/12 ★	22			22
計	66	9	1	76

インターンシップ・特別講演など				
「ニトリ会社説明会」4/18	11			11
「日本におけるこれからのIT産業とその動向」7/31	4			4
「大塚製薬インターンシップ」9/25-26	9			9
「リクナビ・マイナビの使い方を学ぼう」2005/2/7	4			4
計	28			28
総計	94	9	1	104

★：「留学生地域交流推進事業」

昨年度は82名の留学生が参加したが、今年度はそれよりも増加し、最終的には104名の留学生が参加した。内訳を見ると、徳島大学が94名（前年度68名）と最も多く、次いで鳴門教育大学が4名（昨年度6名）、四国大学が3名（昨年度4名）、徳島文理大学が1名（昨年度1名）、徳島工業短期大学が1名（昨年度0名）、不明1名となっていた。

今年度の活動で特筆すべき点としては、(1) イベント・セミナーの回数を見直し、8回から7回に削減し効率化を図った、(2) 「ジョブフェア&交流会」、「ニトリ会社説明会」、「大塚製薬インターンシップ」などを通して、留学生が直接企業側と接触できる機会をできるだけ確保した、(3) 「大塚製薬インターンシップ」、「県内企業訪問」を通して留学生と日本人学生が共に県内企業について学ぶイベントを実施した、これら3点を挙げるができる。

留学生のための就職支援イベント・セミナーの見直し

今回の見直しでは、毎年実施していた「ビジネスマナーと日本語面接への対応」を中止することとした。参加人数の増加が見込めないこと、個別面談で十分対応できることを考慮し、今回から中止とすることとした。

留学生と企業の接触を増やす

今回は、例年実施している「ジョブフェア&交流会」に加え、説明会・特別講演会、インターンシップ、会社訪問を通して留学生が企業と接触できる機会を設けた。

「ジョブフェア&交流会」(7月12日実施)では、徳島県内企業6社(阿波銀行、大塚製薬株式会社、大塚倉庫株式会社、株式会社谷口兄弟商会、喜多機械株式会社、坂東機工株式会社)に参加頂き、16名の留学生の参加を得ることができた。最終的に採用には至らなかったが、同イベントを通して2名の学生を参加企業の面接につなげることができた。

また、会社説明会・特別講演会を通して留学生が参加企業に直接申し込むケースも散見された。最終的な採用には至らなかったが、4月18日(木)に実施した「ニトリ会社説明会」では1名の留学生が実際に申請し、面接に参加した。7月31日(木)に実施した特別講演「日本におけるこれからのIT産業とその動向」では、参加した企業(I-Standard株式会社 東京)に1名の留学生が直接応募を行い、最終的に同社からの内定を得ることができた。

9月25日(水)・26日(木)に実施した「大塚製薬インターンシップ」では4名の留学生が、2月12日(水)に実施した「第7回留学生のための就職支援イベント・セミナー」(大塚製薬株式会社北島工場、パナソニックエナジー徳島工場)では18名の留学生が参加した。これらの訪問を通して将来的に参加企業への応募が促進されることを期待したい。

留学生の動向を見てみると、日本独自の就職システムをよく知らないために日本人学生と比べて後れを取ってしまうことが多いようである。インターナショナルオフィスでは、日本での就職を希望する留学生に必要な情報を得られる機会を設け、安心して就職活動を行えるよう支援していきたいと考えている。



ニトリ会社説明会



大塚製薬インターンシップ

日本人・留学生によるインターンシップ・企業訪問

今年度は、新たな取り組みとして、日本人学生と留学生の協働インターンシップ・企業訪問を行った。具体的な活動は以下のとおり。

(1) 「大塚製薬インターンシップ」

「大塚製薬生産部門でのSDGsの実践について学ぶ」をテーマにインターンシップを実施した。具体的には、①同社の薬品生産ラインを視察し、そこで実践されているSDGs活動について学ぶ、②今後の実践について学生視点から提言を行う、という2点をテーマに留学生(4名)と日本人学生(5名)がインターンシップに参加した。

日時：9月25日(水)・26日(木)

場所：大塚製薬株式会社板野工場

参加人数：徳島大学生9名(留学生4名、日本人学生5名)

内容：9月25日(水) 大塚製薬板野工場視察

9月26日(木) 工場視察に基づくプレゼン(視察体験のまとめと提言)

(2) 「徳島県内企業訪問」

今回は県内企業2社(大塚製薬株式会社北島工場、パナソニックエナジー徳島工場)を留学生と日本

人学生で訪問した。

日時：2025年2月12日（水）10:00-16:00

場所：大鵬薬品株式会社北島工場、パナソニックエナジー徳島工場

参加人数：徳島大学生22名（留学生20名、日本人学生2名）

内容：両社の工場ラインの見学

これまで留学生と日本人学生が共に企業見学などの活動に参加することはなかったが、今回は初めての試みとして、小規模ではあったが日本人学生との協働インターンシップを実施してみた。留学生にとっては、学びたての日本語を使いながら、日本人学生にとっては、使い慣れない英語を使いながらの共同作業であったが、お互い非常に良い学びになったと思われる。

● 就職個別相談

2024年4月～2025年3月末までで、140件の相談に対応した（昨年度は85件）。相談内容としては、応募する企業の選び方、エントリーシートの作成・添削、面接対策、筆記試験対策といった就活に直結する相談が多くあった。

今回、個別相談に時間を割いたこともあり、こちらから直接企業側にアプローチをかけ、内定まで結びつけることができた。結果、6名の留学生が県内外の企業から内定を得ることができた。

これからも個別相談を充実させて、一人でも多くの就職希望留学生が日本で就職を実現できるように支援していきたいと考える。

● 「留学生就職意向動向調査」

今後の留学生を対象とした就職支援事業を検討するために「留学生就職意向動向調査」を実施した。詳細については報告書を参照してもらいたい。

留学生受け入れ及び支援に関する活動

● 渡日前入学許可制度

2015年度にベトナムドンズー日本語学校（ホーチミン市）と協定を結び、徳島大学の学部への入学を目的とする「渡日前入学許可制度」を創設した。本制度は日本語学校からの推薦を受け、書類審査、遠隔面接などを経て入学を許可するものであり、受験者の入学前日が必要となる。本制度で入学が許可された留学生に対しては、検定料・入学料・授業料免除と初年度の奨学金を支給する。また、対象留学生の日本語力を強化するため、入学前に本学で半年間の日本語等予備教育も実施する（Ⅰ型（日本語等予備教育あり）のみ）。

本制度の受け入れ部局は理工学部、生物資源産業学部および総合科学部3学部になり、実施対象校は、2017年度に韓国時事日本語学院、2022年度にはマレーシアの帝京マレーシア日本語学院、2023年度にモンゴルのJOTO EDUCATION CENTER(城東教育センター)と協定を締結し、渡日前入学許可制度による入学選抜試験を実施してきた。対象校を新規開拓するため今年度は、台湾旭文塾日本留学センターを数回訪問し、施設の視察、本制度の説明、意見交換などをへて2025年3月に協定を結び、来年度から実施することになった。そのため、来年度から渡日前入学許可制度の対象校は5校になり、更なる学部留学生の増加が期待される。

2025年度および2026年度の「渡日前入学許可制度による私費外国人留学生選抜」(Ⅱ型（日本語等予備教育なし）、Ⅰ型（日本語等予備教育あり）)については既に、一次選考および二次選考を実施した。応募者状況は韓国の時事日本語学院から1名、マレーシアの帝京マレーシア日本語学院からの4名、モンゴルのJOTO EDUCATION CENTERから4名であり、そのうち7名が理工学部希望、2名総合科学部希望であった。選考の結果、8名が合格し、4月入学の予定である。

下図に示すように、2016年に本制度を実施してから、2025年4月までに受入留学生者数は合計43名（予定を含む）になる。

	合格者数	来日	入学	内訳
第一期	2（Ⅰ型）	2016年10月	2017年4月	理工学部（1名） 生物資源産業学部（1名）
第二期	3（Ⅰ型）	2017年10月	2018年4月	理工学部（2名） 生物資源産業学部（1名）
第三期	3（Ⅰ型）	2018年10月	2019年4月	理工学部（1名） 生物資源産業学部（2名）
第四期	2（Ⅱ型）	2019年4月	2019年4月	理工学部（2名）
	2（Ⅰ型）	2019年10月	2020年4月	生物資源産業学部（2名）
第五期	8（Ⅱ型）	2020年4月	2020年4月	生物資源産業学部（1名） 理工学部（7名）
第六期	3（Ⅱ型）	2022年4月	2021年4月	理工学部（3名）
第七期	3（Ⅱ型）	2022年4月	2022年4月	理工学部（3名）
第八期	2（Ⅱ型）	2023年4月	2023年4月	理工学部（2名）
第九期	8（Ⅱ型）	2024年4月	2024年4月	生物資源産業学部（1名） 理工学部（6名（1名辞退））
第十期	8（Ⅱ型）	2025年4月予定	2025年4月 予定	総合科学部（1名） 理工学部（7名）

● 外国人学生のための進学説明会および日本留学フェア

2024年度 外国人学生のための進学説明会【東京】

日時：令和6年6月29日（土）10：00～16：00
場所：サンシャインシティ文化会館 展示ホールD
東京都豊島区東池袋3-1

参加機関数：143校（国立33校、公立10校、私立75校、短期大学1校、
高等専門学校1校、専修学校23校）

参加人数：1,284名

ブース来訪者数：24名

学部21名（総合科学部8名、医学部1名、歯学部2名、理工学部8名、生物資源産業学部2名）
大学院3名（創成科学研究科3名）



2024年度 日本留学フェア【台湾】

日時：令和6年7月13日（土）、14日（日）
場所：台北 松山文創園區

参加機関数：112機関（国立10、公立3、私立30、短期大学1、その他1、専門学校・日本語教育機関65、
資料参加2）

ブース来訪者数：7月13日 49名、7月14日 41名

学部30名（総合科学部14名、医学部2名、歯学部1名、薬学部1名、理工学部12名、
生物資源産業学部5名）※1名につき複数学部回答有

大学院65名（創成科学研究科56名、医学研究科8名、薬学研究科3名、未記入2名）
※1名につき複数学部回答有



2024 年度日本留学フェア【インドネシア】

日時・場所： 令和6年11月23日（土）
スラバヤ：The Square Ballroom at ICBC Center Surabaya

日時・場所： 令和6年11月24日（日）
ジャカルタ：Balai Sidang Jakarta Convention Center (JCC), Assembly Hall

参加機関数： スラバヤ 21 機関（国立 5、私立 11、日本語教育機関4、その他 1）
ジャカルタ 41機関（国立11、公立2、私立18、専門学校1、日本語教育機関6、その他3）

来場者数： スラバヤ 1, 314名 ジャカルタ 4, 118名

ブース来訪者数：
スラバヤ 約80名（アンケート回収は40名）
学部 23名（総合科学部11名、歯学部1名、理工学部7名、生物資源産業学部3名、未記入1名）
大学院 17名（創成科学研究科 14名、医学研究科4名、薬学研究科2名、未記入1名）
ジャカルタ 約80名（アンケート回収は39名）
学部 20名（総合科学部9名、医学部1名、理工学部9名、生物資源産業学部3名）
※1名につき複数学部回答有
大学院 19名（創成科学研究科16名、医学研究科2名、医科栄養学研究科1名）



2024年度 JASSO日本留学オンラインフェア

日時：令和6年12月8日（日）12時00分～12時30分
参加人数：97名（延べ）

昨年同様、使用言語は英語のみで実施された。パワーポイント資料による大学概要紹介、学部・大学院紹介、よくある質問を紹介した後、チャット欄に書き込まれた質問や、口頭での質問に答える形で、質疑応答を行った。今年度のオンラインフェアでは、「個別相談をしたい」「大学院の説明のみ聞きたい」等、参加者が効率よく多くの学校のセッションに参加できるよう、事前にライブセッションの実施予定を公表していた。今年度は、昨年度（延べ52名）に比べ多くの学生に参加してもらう事ができた。



2024年度 四国4大学合同進学説明会（オンライン）

日時：2024年10月25日(金) 12時:20分～13時:20分
12:45～12:55 徳島大学紹介、13:05～13:20 各ブレイクアウトルームで個別相談
主催：高知大学
対象：千駄ヶ谷日本語学校
参加人数：約10名
ブレイクアウトルームで個別相談：0名

日時：2024年10月28日(月) 18時:00分～19時:00分
18:42～18:35 徳島大学紹介、18:45～19:00 各ブレイクアウトルームで個別相談
主催：高知大学
対象：行知学園日本語学校
参加人数：約15名
ブレイクアウトルームで個別相談：0名

2024年度 大阪大学国費学部留学生のための大学進学説明会（オンライン）

日時：令和6年11月1日（金）
（1回目）11時30分～12時00分
（2回目）12時10分～12時40分
参加人数：5名
（1回目：教室より1名）
国籍：ルーマニア1名
専攻：機械工学
（2回目：オンラインより4名）
国籍：マレーシア2名、シンガポール・モンゴル各1名
専攻：数学・薬学・宇宙科学・獣医学各1名

- ・ 昨年同様、使用言語は日本語のみで実施された。来日前に母国で日本語の学習を行っていた学生もあり、参加者全員が日本語で問題なく応答可能であった。
- ・ 初めに、パワーポイント資料による大学概要紹介、学部・大学院紹介、各学部の選考方法及び受入可能数の説明、宿舍・語学教育の紹介等を行った。その後、一人一人の国籍及び専攻分野を確認し学生からの口頭での質問に答える形で質疑応答を行った。
- ・ 参加者からは、専攻分野におけるコンテスト出場の可否、英語で受講可能な授業の有無、サークル活動等についての質問があった。本学には留学生が多く在籍しており、留学生向けのイベント等英語での交流の機会が多くある事等を伝えた。2回とも参加者は少なかったが、マレーシアの学生とは中国語でも会話する事ができ、一人一人とより近い距離でコミュニケーションを図ることができた。今回の説明会への参加が、本学の留学生数増加に繋がる事を期待する。



● 国際展開推進シンポジウムの開催

2025年3月10日(月)、第19回徳島大学国際展開推進シンポジウム「母国で振り返る私の徳島大学留学生時代」を阿波観光ホテルにおいて開催した。今回は、インドネシア、モンゴル、エジプト、フランス出身の徳島大学卒業・修了留学生4人を講演者として招き、徳島大学での留学生生活を振り返るとともに日本または各出身国における現在の取り組みについて講演を行った。参加者は学内外で合計69名に上った。



第19回徳島大学国際展開推進シンポジウム

母国で振り返る 私の徳島大学 留学生時代

日時: 令和7年3月10日(月)
15:30~17:30

場所: 阿波観光ホテル
3階 ロイヤルパレス
(徳島県徳島市一番町3-16-3)

日本語講演 入場無料 申込不要

※一般の方のご参加もお待ちしております。

徳島での留学生生活は母国でどのように活かされているのでしょうか?
徳島大学に留学し、帰国後母国で活躍されている方々にお話を伺い、
併せて意見交換を行います。

			
Deendarlianto	Dolgorsuren Aldartsogt	Salah Ezzat Mohamed Elzohary	Brandon Quentin
ガジャマダ大学 工学部 教授	モンゴル国立医科大学 生命医学部 准教授	タンタ大学 理学部准教授 タイバ大学 理学部助教授	UiPath プロダクト管理 ディレクター
【インドネシア】	【モンゴル】	【エジプト/サウジアラビア】	【フランス】

主催: 徳島大学高等教育研究センター国際教育推進班
お問い合わせ 徳島大学学務部国際課
TEL 088-656-4741 Mail kokusaifukukachou@tokushima-u.ac.jp



プログラム

- 15:30 開 会 総合司会 金成 海（徳島大学高等教育研究センター 教授）
開会挨拶 高橋 晋一（徳島大学副学長）
学長挨拶 河村 保彦（徳島大学学長）
- 15:40 講 演
- ・インドネシア・ガジャマダ大学における学術キャリア：学術から国家への貢献へ
Deendarlianto（ディーンダリアント）【インドネシア】
 - ・成功の鍵は感謝の心
Dolgorsuren Aldartsogt（ドルゴルステン アルダルツォグト）【モンゴル】
 - ・ナイルから日出る国へ：知識と機会の旅
Salah Ezzat Mohamed Elzohary（サラ エッザ モハメド エルゾハリ）【エジプト/サウジアラビア】
 - ・知能情報から自動化へ
Brandon Quentin（ブランドン カンタン）【フランス】
- 17:00 意見交換会
講演者への感謝状と記念品の贈呈
- 17:30 閉 会

講演者プロフィール

Deendarlianto（ディーンダリアント）【インドネシア】

- 1996年2月 ガジャマダ大学 工学部卒業
2001年4月-2003年3月 徳島大学大学院 工学研究科博士前期課程修了
2003年4月-2006年3月 徳島大学大学院 工学研究科博士後期課程修了
2007年1月-2020年12月 ガジャマダ大学 工学部助教授
2009年3月-2011年6月 Alexander von Humboldt (AvH) 財団の研究員を受け、Helmholtz Zentrum Dresden-Rossendorf (HZDR), Dresden-Germany 流体力学研究所博士研究員
2013年1月-2022年8月 ガジャマダ大学 エネルギー研究センター所長
2015年-2020年8月 インドネシア 国立研究評議会 エネルギー委員会 副委員長
2023年-2028年 インドネシア NTU-シンガポール持続可能性・イノベーション研究所 (INSPIRASI) プロジェクト 全国エグゼクティブディレクター調整官
2021年1月-現在 ガジャマダ大学 工学部教授

Dolgorsuren Aldartsogt（ドルゴルステン アルダルツォグト）【モンゴル】

- 1992年-1998年 モンゴル国立医科大学 医学部卒業
2005年 モンゴル国立法医学センター 専門医（法医学）
2006年-2009年 モンゴル健康科学大学 修士課程修了
2007年-2009年 モンゴル健康科学大学 生命医学部研究者
2009年-2011年 モンゴル健康科学大学 生命医学部講師
2011年4月-2015年3月 徳島大学 口腔科学教育部博士課程修了、研究者
2015年 モンゴル健康科学大学 博士課程修了
2015年-2022年 モンゴル国立医科大学 生命医学部解剖学科学上級講師
2022年-現在 モンゴル国立医科大学 生命医学部解剖学科学准教授

Salah Ezzat Mohamed Elzohary（サラ エッザ モハメド エルゾハリ）【エジプト/サウジアラビア】

- 2004年6月 タンタ大学 理学部物理学科卒業
2004年-2011年 タンタ大学 理学部物理学科教育助手
2009年4月-2011年3月 徳島大学 先端技術科学教育部博士前期課程修了
2011年-2014年 タンタ大学 理学部物理学科准講師
2011年4月-2014年3月 徳島大学 先端技術科学教育部博士後期課程修了
2014年9月-2023年1月 タンタ大学 理学部物理学科講師
2018年3月-現在 タイハ大学 理学部物理学科助教授
2023年2月-現在 タンタ大学 理学部物理学科准教授

Brandon Quentin（ブランドン カンタン）【フランス】

- 2000年-2005年 トゥールーズ国立応用科学研究所 修士・博士課程修了
2005年-2009年9月 徳島大学 先端技術科学教育部博士後期課程修了
2009年-2014年 Silicon Studio社 ソフトウェアエンジニア
2014年-2017年 Bitcraft社 共同創設者
2017年-現在 UIPath プロダクト管理ディレクター

● サマースクールの開催

高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班では、2024年8月1日から9日にかけて、インターナショナルサマースクール“Get Together in Tokushima, Japan 2024”を開催した。このサマースクールは、徳島大学を海外にアピールし、徳島を身近に感じてもらうことで、将来、本学大学院への留学希望者を増やすことを目的に、2012年度から実施している。今年度は、インドネシア、マレーシア、モンゴル、台湾、ベトナムから44名の参加があった。

プログラム期間中、日本人学生との交流、書道、茶道、和太鼓、人形浄瑠璃などの日本文化体験、藍染めや阿波おどりなどの徳島文化体験、企業見学などを行い、参加者は日本や徳島の文化に広く親しんだ。特に、阿南光高校新野キャンパスでの高校生との交流活動、後藤田徳島県知事への表敬訪問、徳島県庁舎の見学を通じて、地域の人々との交流を深めた。また、研究室訪問では、参加者の専攻分野に応じて3学部に分かれ、研究室を訪問し、研究内容や施設・設備を見学した。熱心に質問する姿も見られ、本学の研究に興味を持った様子だった。

このサマースクールを通じて、様々な国や大学からの参加者が出会い、互いに学び合うことで、グローバルコミュニケーション能力の向上を図る機会となった。また、日本人学生や地域の高校生にとっても、国際交流を身近に感じ、今後の留学やグローバルなキャリアを考える良いきっかけとなった。

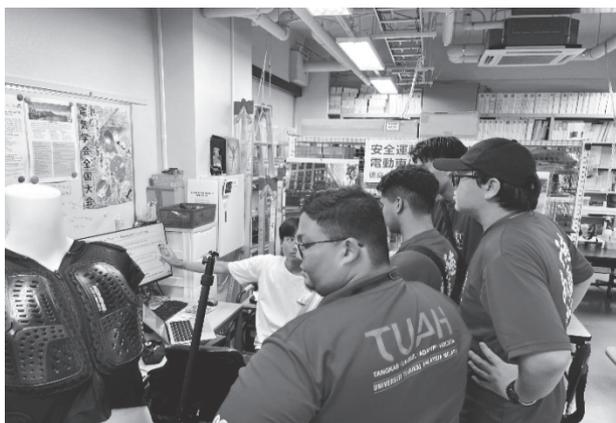
日時：2024年8月1日（木）～ 9日（金）

参加人数：44名

- ・ UTeM（14名）
- ・ モンゴル国立医科大学（2名）
- ・ スルタンイスラミック大学（3名）
- ・ ウダナヤ大学（1名）
- ・ UTM（12名）
- ・ 南台科技大学（1名）
- ・ 国立台湾科技大学（1名）
- ・ 元智大学（3名）、
- ・ ダナン大学（1名）、
- ・ ハノイ土木大学（6名）

日程表

8月1日（木）	午前	準備
	午後	来徳、ホテルチェックイン、全体オリエンテーション
8月2日（金）	午前	開講式、徳島大学紹介、キャンパスツアー
	午後	書道、茶道、イオンモール散策
8月3日（土）	午前	和太鼓・着物体験
	午後	阿波踊り会館、眉山、まち歩き
8月4日（日）	終日	自由行動
8月5日（月）	終日	徳島文化・社会体験 （渦の道、藍染体験、大塚製薬板野工場）
8月6日（火）	午前	日本語・日本事情
	午後	研究室訪問
8月7日（水）	午前	新野キャンパス移動（JR）
	午後	日本人学生・高校生・地域住民との交流、修了式
8月8日（木）	午前	新野キャンパス⇒バスで徳大移動、大阪に移動
	午後	大阪城、近辺ホテル泊
8月9日（金）	午前	チェックアウト



研究室訪問



徳島県知事表敬訪問



人形浄瑠璃体験



書道体験



阿南光高校での交流活動



開講式での集合写真

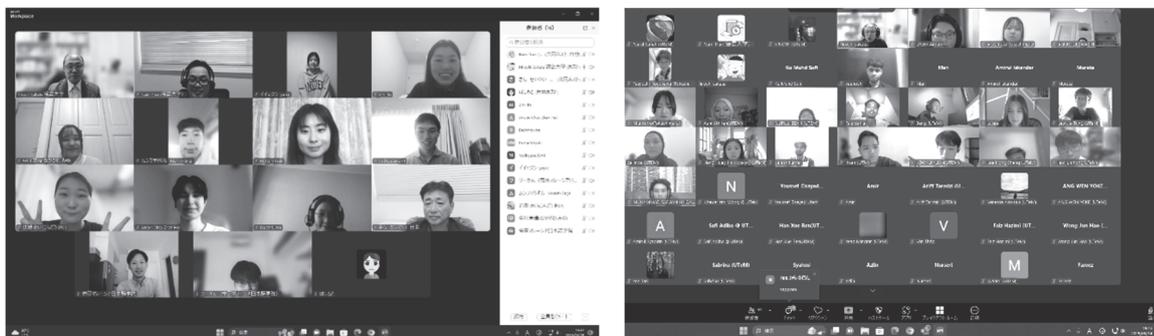
● スプリングスクールの開催

2025年3月8日（土）と14日（金）、海外協定校（日本語学校）の学生を対象にしたスプリングスクールを開催した。以下のセッションをオンラインで提供した。徳島と徳島大学を知ってもらい、親しみを感じてもらうことを目的に行った。日本語教員とともに日本人学生や徳島大学の外国人留学生にも参加してもらい、小さいグループに分かれて話や簡単なプレゼンをするなど、オンラインであってもインターアクティブなセッションになるよう工夫した。

8日（土） 日本語学校向け 14時～16時	徳島大学の紹介
	徳島文化の紹介
	徳島大学の学生との交流

14日(金) 協定校向け 18時~20時	徳島大学の紹介
	徳島食文化の紹介
	日本文化の紹介・交流

3月8日(土) 11名(韓国2名、モンゴル1名、日本人学生4名、本学の留学生2名)
 3月14日(金) 65名(ブルガリア1名、ラトビア1名、マレーシア 58名、ベトナム1名、日本人学生4名)



● 主な活動

4月 新入学生に対するガイダンスの実施 (常三島、蔵本)
 5月~2月 外国人留学生のための就職支援セミナー
 5月 渡日前入学許可制度説明会 (マレーシア、韓国、モンゴル)
 6月 JASSO 主催の進学説明会 (東京)
 6月 日本文化・企業見学ツアー (姫路)
 6月 インターナショナルディ (マレーシア)
 7月 JASSO 主催の日本留学フェア (台湾)
 8月 サマースクールの実施
 8月 渡日前入学許可制度の対象校の新規開拓 (台湾)
 9月 渡日前入学許可制度入試の実施 (マレーシア、韓国、モンゴル)
 10月 ウェルカムイベント
 10月 新入学生に対するガイダンスの実施 (常三島、蔵本)
 10月 四国4大学合同進学説明会 (オンライン)
 11月 多文化体験交流会
 11月 消防訓練の実施
 11月 インターナショナルディ (インド)
 11月 JASSO 主催の日本留学フェア (インドネシア)
 11月 大阪大学日本語日本文化教育センター主催の国費学部留学生への大学進学説明会
 11月 書道イベント
 12月 渡日前入学許可制度の対象校の新規開拓 (台湾)
 12月 世界料理
 12月 JASSO 主催の日本留学オンラインフェア
 1月 日本文化・企業見学ツアー (京都)
 1月 海外危機管理 オリエンテーション
 2月 和太鼓ワークショップ
 3月 第19回国際展開推進シンポジウムの実施

国際交流活動・イベント

留学生地域交流推進事業

本事業は、徳島県内高等教育研究機関での日本人学生と留学生の交流を推進することを目的に、徳島県が2024年度に新しく始めた国際交流推進事業である。同事業の支援を受けて、以下の3つの交流イベントを開催した。なお、各活動には、後述するグローバル・パーソン集中プログラム（GRIP, Global Person Resources Intensive Program）に参加する日本人学生も多く参加した。

● ①「日本の高校で国際交流を体験しよう」2024年9月24日（水）実施

参加人数：15名（徳島大学14名（留学生9名、日本人学生5名）、徳島文理大学1名（日本人学生））
場所：徳島市立高校

徳島市立高校の協力の下、本イベントを実施した。内容としては、①学食で市立高校生との昼食体験、②高校授業参観&自国の文化・生活についてプレゼン、③部活動体験、以上3つの活動を行った。

特に、最後の部活動体験では、弓道部（2名）、ボート部（3名）、書道部（3名）、華道部（2名）、茶道部



部活動体験（茶道）



部活動体験（ボート）

（3名）、美術&漫画部（3名）に参加学生を受け入れてもらい、部活動を直接体験することができた。参加した留学生からは、「高校の部活は漫画で知ってたが、これほどバラエティーがあるとは思わなかった」「こういう部活があるなら、ぜひ自分の国でも取り入れて欲しい」などの意見を聞くことができた。

● ②「徳島の観光・文化を知ろう」2024年11月9日（土）実施

2024年11月5日（火）、8日（金）事前指導

参加人数：46名（徳島大学40名（留学生28名、日本人学生12名））
（徳島工業短期大学5名（留学生3名、日本人学生2名*））
* 日本人学生2名は事前指導のみ参加
（四国大学1名（留学生1名））

場所：藍の館、鳴門市ドイツ館、霊山寺・極楽寺

このイベントは、10月から徳島の高等教育研究機関に新しく入学してきた留学生を対象としたもので、県内にある観光・文化施設（藍の館、霊山寺・地蔵寺）を訪問し、徳島の文化資産である藍染と四国遍路を体験してもらった。

藍の館では、実際に藍染を体験しただけでなく、藍染の歴史や手法について学び、資料館の視察、併設されている旧奥村家住宅内部の視察を行った。特に、藍染の手法については、阿波藍が全国に広まるきっかけとなった「すくも」の作り方などについて学ぶことができた。



藍染体験



遍路体験（極楽寺）

四国遍路体験では、エアトラベル徳島（株）のモートン氏の協力を得て、実際に霊山寺から極楽寺までの約4キロを歩き、遍路道の体験を行った。極楽寺では、モートン氏

からいくつかのクイズが出され、各参加者がチームで答えを探し出すなどの活動を行い、遍路体験を楽しんでいた。

鳴門市ドイツ館では、実際の施設を訪問し、かつて坂東収容所があった場所に立ち寄った。板東俘虜収容所で過ごしたドイツ兵たちの活動の様子や、地域の人々との交流の様子を学ぶことができた。

なお、これら3か所の施設を訪問するための事前学習として、11月5日(火)、8日(金)18:00～19:30までモートン氏の協力を得ながら「徳島文化 Field Tour 事前学習」を実施した。

● ③「徳島の企業・産業を知ろう」2025年2月12日(水)実施

参加人数：29名(徳島大学29名(留学生26名、日本人学生3名))

場所：大鵬薬品株式会社北島工場(北島町)、パナソニックエナジー徳島工場(松茂町)

現在、徳島県では様々な外国人県内定着を促進するための試みが展開されているが、今回はその一助として、本交流推進事業の支援を基に、県内の大手企業(大鵬薬品株式会社北島工場、パナソニックエナジー徳島工場)を訪問した。

大鵬薬品株式会社北島工場では、工場内に設置されているがん治療薬の製造工程を視察した。口腔内で溶ける技術は特許保護のため見れなかったが、原料の搬入・計量から始まる治療薬(錠剤)の製造過程を細部にわたり解説してもらった。同時に、工場内に設置されている桜並木やサイドウォークを地域住民に開放しており、工場と地域が密接にかかわっていることを学ぶことができた。

パナソニックエナジー徳島工場では、主にリチウム電池の製造過程を視察した。製造過程は多岐にわたるが、同工場で製造されているリチウム電池は、24時間365日稼働するデータセンター用電源や、安定稼働が求められるヘルスケア機器などに多く採用されていることから、信頼できる技術に基づく品質の高いバッテリーの製造に様々な工夫がなされていることを知ることができた。



大鵬薬品北島工場



パナソニックエナジー徳島工場

日本文化・企業見学旅行(姫路城)

6月16日に日本文化企業見学旅行を実施した。本見学旅行は、留学生が日本の文化や歴史、技術への見聞を広め、留学生同士の交流を深めることを目的としている。

最初に見学したアサヒ飲料明石工場では、係員の説明を聞きながら製造ラインを見学した。徹底された衛生管理や先進的な機械の導入に驚くとともに、多くのことを学んでいた様子だった。



姫路城では、天守閣へと続く狭い階段を汗かきながら上り、登り切った瞬間には皆が笑顔を見せた。日本の伝統建築を間近で観賞するとともに、実際に歩くことで、その広さや壮大さを体感していた。

今回の見学旅行には12か国から留学生40人が参加し、平均満足度は95%だった。日本文化への理解を深めるだけでなく、異なる国の留学生同士が交流し、お互いを理解する貴重な機会となった。

日本文化・企業見学旅行（京都）

1月6日（月）～7日（火）、留学生日本文化・企業見学旅行を実施した。本見学旅行は、留学生が日本の文化や歴史（伏見稲荷大社、清水寺、京都御所、金閣寺）や技術（関西光量子科学研究所、京都鉄道博物館）への見聞を広め、留学生同士との交流を深めることを目的としている。



最初に訪れた関西光量子科学研究所では、説明を聞いた後、係員の案内のもと研究施設を見学した。伏見稲荷大社、清水寺、京都御所、金閣寺では、日本の伝統建築を間近で観賞するとともに、実際に歩くことで、その広さや壮大さを体感していた。京都鉄道博物館では、自由見学を通じて、留学生たちは日本の鉄道技術の歴史や現状について理解を深めた。

今回の旅行には留学生40人が参加し、平均満足度は94.5%だった。日本文化への理解を深めるだけでなく、異なる国からの留学生同士が交流し、お互いを理解する貴重な機会となった。

International Day

今年度から新たな試みとして「International Day」を年に数回実施することとした。企画自体が年度の終わりになってしまったため今年度は以下の活動を行うにとどまったが、次年度からは活動を広げて実施したい。今年度の具体的な活動は以下のとおり。

● Let's Enjoy Malaysian Foods and Learn Malaysian Culture and Language

2024年6月27日（月）18:00～20:00

場所：地域創生・国際交流会館 5F フューチャーセンター
参加者：22名（日本人学生13名、留学生9名）

本イベントでは、ナンゴレン、サテーなどの伝統的な食べ物にまつわる歴史や文化、言語をマレーシア人留学生に紹介してもらい、そこから同国に対する理解を深めていくことであった。

● Let's Enjoy Indian Foods and Learn Indian Culture and Language

2024年11月15日（金）18:00～20:00

場所：地域創生・国際交流会館 5F フューチャーセンター
参加者：29名（日本人学生18名、留学生11名）

本イベントでは、今後のインドとの国際交流について力強いメッセージが参加者に送られたインドのシビ・ジョージ駐日大使のビデオメッセージを見た後、インド人留学生がインドの文化や食文化について発表した。その後、みんなで手作りのビリヤニやインド風スイーツ、ドリンクを楽しんだ。最後は、インド食文化に関するビンゴゲームで盛り上がり、一緒にインドのダンスを踊った。全体を通して非常に盛況なイベントであった。





Global Lunch

常三島地区における留学生との日常的な交流を促進し、1FのGRIP English Free Talk Sessionを広く周知するために、Global Lunchを実施した。前期は月曜の昼休みに開催したが、後期は水曜・木曜の2回開催することとし、火曜は日本語を、木曜日は英語を主に使って交流を行った。開始日、終了日、および開催場所は以下のとおり。

【Global Lunch 実施日及び場所】

- ・開催場所：地域創生・国際交流会館 1F 多言語コモンラウンジ
- ・実施日時および参加人数（合計 94名 留学生 41名、日本人学生 53名）

【前期】計 18名（留学生 6名、日本人学生 12名）

6月24日（月）	11:50-12:50	5名（留学生 2名、日本人学生 3名）
7月1日（月）	11:50-12:50	3名（留学生 1名、日本人学生 2名）
7月8日（月）	11:50-12:50	7名（留学生 2名、日本人学生 5名）
7月22日（月）	11:50-12:50	3名（留学生 1名、日本人学生 2名）

【後期】計 76名（留学生 35名、日本人学生 41名）

10月22日（火）	12:00-12:50	6名（留学生 4名、日本人学生 2名）
10月29日（火）	12:00-12:50	7名（留学生 4名、日本人学生 3名）
10月31日（木）	12:00-12:50	9名（留学生 5名、日本人学生 4名）
11月5日（火）	12:00-12:50	8名（留学生 5名、日本人学生 3名）
11月7日（木）	12:00-12:50	3名（留学生 0名、日本人学生 3名）
11月12日（火）	12:00-12:50	8名（留学生 4名、日本人学生 4名）
11月14日（木）	12:00-12:50	4名（留学生 1名、日本人学生 3名）
11月21日（木）	12:00-12:50	2名（留学生 0名、日本人学生 2名）
11月26日（火）	12:00-12:50	5名（留学生 3名、日本人学生 2名）
12月3日（火）	12:00-12:50	4名（留学生 0名、日本人学生 4名）
12月5日（木）	12:00-12:50	2名（留学生 0名、日本人学生 2名）
12月10日（火）	12:00-12:50	5名（留学生 3名、日本人学生 2名）
12月12日（木）	12:00-12:50	4名（留学生 1名、日本人学生 3名）
1月8日（水）	12:00-12:50	5名（留学生 2名、日本人学生 3名）
1月16日（木）	12:00-12:50	4名（留学生 3名、日本人学生 1名）

● Global Lunch 蔵本

医学部主催の English Plus は、2021 年前期以降中止しているが、蔵本地区における日本人学生と留学生の英語での交流を促進するため、2015 年 1 月に国際教育推進班が開始した。

- ・開催場所：蔵本会館 2F 多目的 3 室
- ・実施時間帯：12:00-12:50



1月8日(水)	8名(留学生0名、日本人学生8名)
1月15日(水)	1名(留学生0名、日本人学生1名)
1月22日(水)	2名(留学生1名、日本人学生1名)
1月29日(水)	3名(留学生1名、日本人学生2名)



多文化体験交流会

多文化体験交流会は、2024年11月1日(金)に高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班が主催し、開催した。徳島地域の外国人留学生や日本人学生、地域の人々が交流を深めることを目的に、平成14年度から実施している。

当日は、外国人留学生、日本人学生、外国人研究者に加え、地域の国際交流団体の関係者など約80名が参加した。交流会では、留学生が自国の文化を紹介し、ダンスや歌を披露した。どの演目も素晴らしく、パフォーマンスが終わるたびに会場から大きな拍手が送られた。

最後に、徳島大学生物資源産業学部の螺旋連とともに、参加者全員で阿波踊りを踊った。外国人留学生、日本人学生、地域の人々が一堂に会し、互いの文化を体験しながら交流を深める貴重な機会となった。



新入留学生ウェルカムイベント

高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班は、2024年度より新入留学生ウェルカムイベントを開催した。本イベントは、新入留学生が新しい環境に慣れ、日本人学生や他の留学生と交流できる場を提供することを目的としている。

場所：地域創生・国際交流会館 1F
多言語コモンラウンジにて、



2024年4月22日(月)18時~19時61名(イベントスタッフ7名、留学生13名、日本人学生41名)が参加した。過去にGRIPに参加した日本人学生とGRIP Student StaffとしてFree Talk Sessionsに協力してくれている留学生から運営スタッフを日本人学生4名、留学生3名にスタッフとして参加してもらった。スタッフとは事前にミーティングを行い、具体的な企画を考えてもらい、当日の司会進行も担当してもらった。

2024年10月7日(月)18時~20時45名(留学生31名、日本人学生14名)が参加した。イベントでは、留学生と日本人学生と一緒にゲームをしたり、軽食をとりながら懇談を行った。活気のある雰囲気の中、参加者は積極的にコミュニケーションを取り、すぐに打ち解けていた。



世界の料理

2024年12月14日(土)11時から13時まで、地域創生・国際交流会館1F多言語コモンラウンジにて、高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班が世界料理イベントを開催した。本イベントは、留学生、日本人学生、地域サポーター(JSS)が各国の家庭料理を持ち寄り、料理を通じて交流を深めることを目的としている。



当日は、留学生22名、日本人学生7名、地域サポーター(JSS)8名が参加した。参加者がタジン(モロッコの煮込み料理)、キール(パキスタンの米を使った甘いデザート)、ツイワン(モンゴルの麺料理)などの世界的に知られる料理や、そば米雑炊/そば米汁(徳島の郷土料理で、そばの実を使った汁物)、筑前煮(鶏肉と根菜を煮込んだ日本の伝統料理)を手作りで持ち寄るポットラック形式で、日本語と英語で交流しながら楽しんだ。イベントでは、参加者が食事を楽しみながら懇談し、活気あふれる雰囲気の中、積極的にコミュニケーションを取っていた。自然と打ち解け、和やかな交流の場となった。

徳島大学インターナショナルオフィス
世界の料理を体験しよう
"Experience Cuisines from Around the World"

日時 Date & Time
12月14日(土)11時~13時
場所 Place
徳島大学三島キャンパス
国際交流センター1F
1-3-1 Tokushima University
Tokushima, Japan 770-8502

参加条件 Participation Requirements

- ・ 徳島大学に在籍する留学生、日本人学生、地域サポーター(JSS)が対象です。
- ・ 参加費は無料です。
- ・ 参加希望者は、事前に国際交流センターまでお申し込みください。
- ・ 参加希望者は、事前に国際交流センターまでお申し込みください。
- ・ 参加希望者は、事前に国際交流センターまでお申し込みください。

参加申し込み Participation Application

2024年12月14日(土)11時~13時
国際交流センター1F
1-3-1 Tokushima University
Tokushima, Japan 770-8502
TEL: 087-831-2111

蔵本宿舎入居者のための交流会 Inter-Kafe-Kuramoto

蔵本宿舎には、外国人留学生、日本人学生及び職員が入居しているが、日頃交流は非常に限られている。2023年度から初めて、蔵本宿舎談話室において、Inter-Kafe-Kuramotoを開催した。2024年度も継続的に2回を開催した。



5月17日(木) 18:00-19:00 12名(マレーシア、韓国、ベトナム、ベルギー、イタリア、中国からの留学生9名、日本人3名)

10月18日(木) 18:00-19:00 9名(韓国、ベトナム、中国からの留学生6名、日本人3名)

本交流会では、蔵本宿舎に入居している外国人留学生及び日本人学生に交流する機会を提供し、相互理解を促進することを目的に開催した。参加した留学生が順番に自己紹介を行い、そして、様々な国のお菓子を食べながら、英語で会話を楽しんだ。

その他の交流イベント

● 書道体験

2024年11月30日(土) 10時30分～12時まで、常三島キャンパス総合科学部2号館内で書道体験イベントを開催した。今回のイベントには、日本語研修コースで学ぶ学生10名が参加したが、以前GRIPに参加していた2名の日本人学生と地域サポーター(JSS)2名の協力を得てイベントを開催した。

それぞれが講師の指示に従い、自分の好きな漢字を基に書道を体験した。



● 和太鼓体験

2025年2月1日(土)10時~11時30分まで、常三島キャンパス内けやきホールにて和太鼓体験イベントを実施した。昨年同様、吉野川市で活動を行っている「NPO 法人太鼓の楽校」に協力頂き同イベントを開催し、日本語研修コースで学ぶ留学生8名が和太鼓を体験した。



学生サポーター

本学外国人留学生をサポートし、交流活動を支援する「学生サポーター」(本学日本人学生)がある。センターが実施する日本語教育には集中講習型の日本語研修コース、外国人留学生・研究者・研究生とその家族対象の総合日本語コースがあり、各クラスの要請に応じて学生サポーターに授業や日本文化体験イベントへの参加を要請している。また、サマースクールをはじめ、センターで行われる事業のサポートも依頼している。

学生サポーターには、40名が登録している(2025年3月現在)。

日本語教育

日本語研修（初級）コース

概要

- 文部科学省大学院入学前予備教育（大使館推薦）、教員研修生、学内公募生を対象とし、大学内外での生活を一人で、成人として乗り切れる日本語力を身につける。
- 集中型で実施（月曜～金曜、毎日3時間）する。日本の文化・習慣・社会規範・日本人のコミュニケーションの仕方などを授業に盛り込み、日本人学生や地域住民との活動を含む学内外の場での日本語・日本文化学習を実施する。
- コース全体を複数のプログラムに分け、それぞれのプログラムで筆記試験と口頭試験を行い、学習評価を行う。また、毎日の授業の初めに小テストを行い、事前学習を確認する。
- 語彙や活用の動画を事前に視聴・学習し、授業ではコミュニケーションの習得を重視することで、反転授業の形式を取り入れる。

2024年度

- すべてのクラスを対面で実施した。
- 新しい課に入る際、語彙とディクテーションのテストを行い、予習や復習の徹底をはかった。
- コースを複数のユニットに分け、ユニット終了ごとに筆記と口頭テストを実施した。
- 漢字はハンドアウトとプラクティスシートを作成し使用した。
- 全ての課において、予習用の資料（「文法ノート」）、オンライン語彙クイズ、および宿題（「ワークブック」）を徳大独自で作成、使用した。

コーディネーター 橋本 智

期間と日程

<前期> 2024年4月17日（水）～ 2024年8月9日（金）
8:40～11:50
78日間 合計234時間

<後期> 2024年10月7日（月）～ 2025年3月6日（木）
8:40～11:50
90日間 合計270時間
教員研修生のみ 日本文化研究 22.5時間（12:55～14:25）

受講生

<前期>

身分	国籍	専門
創成科学研究科 博士後期1年	中国	知能情報
理工学部 特別聴講学生	コスタリカ	電気工学
医学研究科 博士1年	モンゴル	核医学

<後期>

身分	国籍	専門
教員研修学生	ガーナ	数学教育
教員研修学生	ガーナ	化学教育
教員研修学生	ケニア	体育教育
教員研修学生	モロッコ	英語教育
教員研修学生	マダガスカル	英語教育
教員研修学生	ウガンダ	農業教育
理工学部 研究生	パキスタン	科学技術
理工学部 研究生	ネパール	コンピュータサイエンス
創成科学研究科 博士前期1年	バングラデシュ	光科学
口腔科学研究科 博士1年	モンゴル	矯正歯科

主な教材 <前期、後期共通>

- 「みんなの日本語 初級 I」本冊・翻訳文法解説書 第2版 スリーエーネットワーク
- 「みんなの日本語 初級 II」本冊・翻訳文法解説書 第2版 スリーエーネットワーク
- 「使える日本語」徳島大学国際センター
- 語彙・慣用表現 動画 徳島大学高等教育研究センター
- 文法ノート 徳島大学高等教育研究センター
- ワークブック 徳島大学高等教育研究センター
- 漢字ワークシート 徳島大学高等教育研究センター
- 漢字プラクティスシート 徳島大学高等教育研究センター
- オンライン語彙クイズ 徳島大学高等教育研究センター



日本語研修（上級）コース

概要

- 渡日前入学許可制度で学部に入学者を対象にする。
- 入学年度の半年間、日本語レベルの向上を目的に集中コースを行う。日本人学生と一緒に授業を履修し単位取得ができるように、十分な日本語能力を身につける。
- 日本留学試験を受け、本学の入学試験に合格している学生を対象にするため、大学の講義を聞いたり、教科書を読んで理解したりできる能力を養う。また、講義を聞くことに慣れさせるため、数学や自らの専門の学部の授業を聴講させる。
- 翌年の4月から日本人学生と同じように新入生として授業を履修できるよう、日本での生活に慣れさせる。そのために、生活指導や文化体験などを行う。
- 語学マイレージ・プログラムの実施により、留学生も英語のマイレージ・ポイントを取得する必要があり、そのために日本語だけでなく英語能力も向上させる。

2024年度：受講該当学生がいなかったため、開講しなかった。

日本文化研究（後期）

実施概要

「日本文化研究」は、国際センターが平成 30 年度後期より開始した日本語研修コース受講生を対象としたリサーチ・ベースの授業で、留学生が各自の興味・関心に基づき設定したテーマ（特に、日本文化や社会に関するテーマ）について小規模な調査・研究を行うことを目的としている。

ただ、今回に関しては、日本人学生との協働を実現するために、教養教育「異文化交流プロジェクトワーク（2）」と開講時間・場所を合わせて授業を展開した。

開講期間：2024年10月5日（木）～2025年2月8日（木）

授業場所：地域創生・国際交流会館 多言語交流コモンラウンジなど

回	日付	時間	内容
1	10月5日（木）	12:50～14:20	Class Orientation
2	10月12日（木）	12:50～14:20	異文化交流の重要性について（講義）
3	10月19日（木）	12:50～14:20	Group Making for Project 1: Local Foods in Tokushima
4	10月26日（木）	12:50～14:20	Research Work for Project 1 (1)
5	11月2日（木）	12:50～14:20	Research Work for Project 1 (2)
6	11月9日（木）	13:00～15:30	Preparation for Presentation
7	11月16日（木）	13:00～15:00	Presentation for Project 1
8	11月30日（木）	11:00～19:00	Group Making for Project 2: Let's Explore AEON Mall
9	12月7日（木）	12:50～14:20	Research Work for Project 2 (1)
10	12月14日（木）	13:00～17:30	Research Work for Project 2 (2)
11	12月21日（木）	12:50～14:20	Preparation for Presentation & Video Making
12	12月24日（木）	13:00～17:30	Video Presentation for Project 2
13	1月9日（木）	12:50～14:20	Group Making for Project 3: Let's Explore Ebisu Festival Walking Tour at Ebisu Festival
14	1月16日（木）	12:50～14:20	Research Work & Video Making for Project 3 (1)
15	1月23日（木）	12:50～14:20	Research Work & Video Making for Project 3 (1)
16	1月30日（木）	12:50～14:20	Video Presentation for Project 3

受講生 6名：上記日本語研修コース（高等教育研究センター 教員研修留学生）に同じ

評価および所感：

今回の授業では初の試みであったが、日本人学生は異文化交流プロジェクトワーク（2）受講生として、留学生は本日本文化研究受講生として参加し、各種プロジェクトワークを行った。上記の日程表にも記載しているように、最終的には3つのプロジェクト（Local Foods in Tokushima、Let's Explore AEON Mall、Let's Explore Ebisu Festival）を完了することができ、留学生・日本人学生ともに非常に良い体験を共有することができた。

2回目、3回目の発表を口頭で行うことも検討したが、留学生の家族や友達にも活動について評価してもらうためにパワーポイントを使って動画を作成してもらうように変更した。最終的には留学生からの連絡が上手いかず、十分な評価を得ることができなかったが、来年からはしっかりと留学生の家族などからも評価を得るようにしたいと考える。

総合日本語 Japanese Language Program

- ・ **コース概要**
 - ・ 未習から中級までの日本語学習を希望する学生、研究者とその成人家族を対象とする。
 - ・ 常三島・蔵本キャンパス、あるいはオンラインで実施する。
 - ・ 希望者には参加証書を発行する。
- ・ **コーディネーター**
橋本 智
- ・ **実施概要**
- ・ **開講クラスと使用教材**

クラス名	レベル	JLPT 換算	CEFR 換算	教科書
初級 1	未習者-初級	-	A1	「いろどり」入門 1 L1~L10
初級 2	初級	N5	A1	前期:「みんなの日本語」初級 I L14~L25 後期:「いろどり」入門 2 L11~18 「いろどり」初級 1 L1~L3
初級 3	初級	N5	A1	「みんなの日本語」初級 II L26~L38
初級 4	初級	N5	A1	「みんなの日本語」初級 II L39~L50
中級 1	中級	N4	A2	「まるごと」初中級 トピック 1~5
中級 2	中級	N3	B1	「みんなの日本語」中級 I L7~L12
中級 3	中上級	N3~2	B2	「みんなの日本語」中級 II L1~L6
中級 4	中上級	N2	B2	「みんなの日本語」中級 II L7~L12
上級 1	上級	N2~1	C1	(学生のレベル・ニーズに合わせて検討)
上級 2	上級	N2~1	C1	(学生のレベル・ニーズに合わせて検討)

- ・ **使用教室**
地域創生・国際交流会館 G301、ELCS
総合科学部 1号館 インターナショナルオフィス教室
蔵本会館 多目的室 3、5
- ・ **受講者数**

	受講者数 (カッコ内は申し込み者数)			
	前期 2024/5/7 ~ 2023/7/22		後期 2023/10/16 ~ 2024/1/31	
	常三島	蔵本	常三島	蔵本
初級 1	4 (4)	13 (13)	1 (3)	2 (2)
初級 2	-	7 (7)	-	7 (9)

初級 3	-	6 (6)	-	4 (4)
初級 4	-	-	-	-
中級 1	4 (4)	4 (4)	4 (5)	-
中級 2	-	-	4 (6)	-
中級 3	4 (7)	-	-	4 (4)
中級 4	-	3 (3)	-	4 (4)
合計	45 (48)		30 (37)	

・ 日程

前期	月	火	水	木	金
08:40～10:10	蔵本初級 3 蔵本中級 1			蔵本初級 3	蔵本中級 1
10:25～11:55	蔵本初級 1	常三島中級 1		蔵本初級 1	常三島中級 1
12:50～14:20	常三島中級 3		常三島初級 1 常三島中級 3		常三島初級 1
14:35～16:05		蔵本初級 2			蔵本初級 2
16:20～17:50					蔵本中級 4

後期	月	火	水	木	金
08:40～10:10	蔵本中級 4	蔵本初級 1		蔵本中級 4	蔵本初級 1
10:25～11:55			常三島中級 2		常三島中級 2 蔵本初級 3
12:50～14:20		常三島中級 1	常三島初級 1	常三島中級 1	常三島初級 1
14:35～16:05		蔵本上級 1	蔵本初級 3		蔵本上級 1
16:20～17:50		蔵本初級 2			蔵本初級 2

・ アンケート結果

前期 (回答 26)

Q: 日本語のクラスはどうでしたか。

評価	5 とても満足した	4	3 普通	2	1 全く満足しない
人数	24	2	0	0	0
%	92%	8%	0%	0%	0%

理由:

- 先生がとても忍耐強く教えてくれた。先生がとても良く、授業は教育的だった。協力的で、日本語を快適に学べた。困ったとき、いろいろ教えてくれた。
- たくさん日本語と日本の文化を勉強できた。
- 覚えることより、使えるようになるのが大切だ。

- クラスで友だちができ、楽しい雰囲気だった。

後期（回答 19）

Q：日本語のクラスはどうでしたか。

評価	5 とても満足した	4	3 普通	2	1 全く満足しない
人数	14	4	1	0	0
%	74%	21%	5%	0%	0%

理由：

- とても楽しかった。楽しい時間だった。
- カリキュラムがよく、宿題が少なかった。
- 先生は親切で、新しい文法と言葉を習った。よく準備されていて、上手にクラス運営がされていた。先生はとても責任感があり、授業の内容はとても役に立ちました。
- 時々、よく理解できなかった。

海外留学関連

高等教育研究センターによる海外留学プログラム・サポート

① 海外現地・オンライン留学プログラム

夏休み

留学説明会 2024年4月23日(火)、24日(水) 参加者数：合計72名

名称	英語・アメリカ文化研修
留学先	南イリノイ大学 (アメリカ)
期間	5週間 2024年8月17日～9月22日
参加人数	5人
概要	Center for English as a Second Language (CESL) による授業。U.S. Culture Immersion Program 英語：週15時間、コミュニティ活動：週5時間 JASSOの海外留学奨学金を該当学生に支給
形態	大学の寮に滞在

名称	中国語・台湾文化研修
留学先	南台科技大学 (台湾)
期間	2週間 2024年8月18日～9月1日
参加人数	5人
概要	Mandarin and Culture Experience Program for 2 weeks 中国語24時間、フィールドトリップ(台南、高雄)、現地日本語授業への参加 First Step Program (本学教員が往復路と数日のみ同行)
形態	大学寮

名称	英語・マレーシア文化研修
留学先	マレーシアマラッカ技術大学 (カナダ)
期間	10日間 2024年8月26日～9月5日
参加人数	10人
概要	First Step Program (本学教員が全行程同行)。英語クラス、文化体験、フィールドトリップなど
形態	大学の寮に滞在

留学先	韓国海洋大学 (韓国)
期間	2週間 2024年8月4日～8月24日
参加人数	1人
概要	韓国文化体験、韓国語学習など。実施大学が参加者を選考、費用負担
形態	大学寮に滞在

留学先	デラサールアラネタ大学 (フィリピン)
期間	2週間 2024年8月19日～8月30日、4週間 2024年8月19日～9月13日
参加人数	2週間：8人、4週間4人
概要	一対一の英語セッション (1日50分2コマ)
形態	オンライン

春休み

留学説明会 2024年10月11日(金)、15日(火) 参加者数：合計48名

名称	英語・ニュージーランド文化研修
留学先	オークランド大学(ニュージーランド)
期間	4週間 2025年2月8日～3月9日
参加人数	2人
概要	English Language Academyによる授業。4 Weeks General English 英語：週20時間
形態	ホームステイ

名称	英語・カナダ文化研修
留学先	トリニティウエスタン大学(カナダ)
期間	5週間 2025年2月13日～3月19日
参加人数	6人
概要	Language & Leadership Summer Program Language & Communications Lesson：50時間 Day Trips：18時間 Team-building Activities：7時間 Orientation：9時間 Volunteering：7時間 JASSOの海外留学奨学金を該当学生に支給
形態	ホームステイ

留学先	セントポール大学フィリピン(フィリピン)
期間	2週間 2025年2月24日～3月8日
参加人数	8人
概要	English Camp at SPUP
形態	大学寮に滞在

留学先	デラサールアラネタ大学(フィリピン)
期間	2週間 2025年2月17日～3月1日、4週間 2025年2月17日～3月14日
参加人数	2週間：4人、4週間：(参加者なし)
概要	一対一の英語セッション
形態	オンライン

通年

派遣先	慶北大学(韓国)
参加人数	1人
形態	交換留学

① 個別留学相談

インターナショナルオフィスと国際課の教職員が学生の留学相談に対応している。相談内容は留学先、留学形態、留学期間、休学の必要性、「トビタテ！留学 JAPAN」、ワーキングホリデーに関するものなど、多岐にわたる。長期留学に関する相談、奨学金に関する相談もあり、目的に合ったプログラム・行き先の選び方や留学費用に関する質問も受けた。学部で実施される留学についての質問も多く、学部の留学相談教員や事務職員に相談するよう促した。英語能力向上に関する相談もあり、GRIPや留学生との交流イベント、学生サポーター制度などを紹介した。

相談人数（対面で教員研究室を訪問した人数）：47人

(3) 官民協働海外留学支援制度「トビタテ！留学 JAPAN」

過去に「トビタテ！留学 JAPAN」に参加した学生からの説明も加え、募集説明会を開催した。また、申請希望学生に対する留学計画の相談を受けたり、申請書のサポートを行ったりした。

「トビタテ！留学 JAPAN」 第 17 期
説明会 2024 年 11 月 25 日 オンライン
申請者 4 人

(4) その他の留学支援

オープンバッジ（デジタルバッジ）

本年度前期より、高等教育研究センター（インターナショナルオフィス）が主催する国際交流プログラム等の修了者へオープンバッジを発行した。オープンバッジの導入により、学生が国際交流により身につけた知識・スキル・経験が、デジタル証明として明示することができ、SNS やメールの署名で共有できることから、知識・スキル等をオンライン上でアピールできる。また、国際交流の経験が可視化されることで、学習意欲が向上されるとともに、今後の学習プランやキャリア設計の構築に寄与することが期待される。



海外留学安全対策オリエンテーション

海外現地留学をする学生と海外留学に関心がある学生や教職員を対象に、海外留学生安全対策協議会（JCSOS）の海外セキュリティアドバイザーを講師として招き、海外危機管理オリエンテーションを開催した。

海外でトラブルに巻き込まれないための予防策、万一巻き込まれてしまった場合の対処法などについて、海外でのトラブル事例をもとにお話いただいた。本セミナーは海外留学を予定している本学学生には参加を必須としている。参加できなかった学生は録画された動画を視聴することになっている。

Global Space Josanjima / Kuramoto

常三島・蔵本両キャンパスに「Global Space」を設置している。学生が海外協定校情報、海外留学情報、英語・外国語や海外文化に関する資料や書籍を自由に閲覧できるようにしている。また、海外留学相談や GRIP、外国人留学生と日本人学生との交流、外国人留学生対象の日本語の授業、国際交流のサークル活動などを行う場所としても活用されている。

「困ったときの英語講座」

海外留学をする学生を対象に、病気など緊急時に役立つ英語のフレーズや語彙を学ぶセッションを開催した。前期、後期とも 1 回 1 時間半で 2 回実施した。休み中に留学する学生の参加は必須としている。

グローバル・パーソン集中プログラム (GRIP, Global Person Resources Intensive Program)

● 目的および主旨

インターナショナルオフィスは、全学的なグローバル人材の育成を目的として、2021年度から「グローバル・パーソン集中プログラム (GRIP, Global person Resources Intensive Program)」を継続して実施しており、今年度は前期に第7期生(9名)、後期に第8期(7名)がプログラムを修了した。

このプログラムは、自国および他国の文化・歴史を理解し、外国語による高いコミュニケーション能力を有した、多様な人と協働できる「グローバル・パーソン」の育成を目的としており、学生たちが学部を超え、海外大学の学生とのオンラインでの協働学習を行うことで、異なる者への理解と実践的な英語コミュニケーション能力の向上を促進するための活動を展開している。今年度、第7期、第8期における活動の概略は以下のとおり。

● 活動の概略と内容

【第7期 GRIP 概要】

- ・日程：2024年5月14日(火)～10月1日(火)
- ・選考：オンライン英語テスト(CASEC)の結果および提出書類をもとに総合的に判定
- ・奨学金：修了学生に対して「支援奨学金」をプログラム参加に係る費用の全額程度支給
- ・参加者数：11人(うち修了者9人)

日付	セッション項目	回数	時間数
5/14(火)	開講式	1	1
5/17(金)	異文化理解・英語学習オリエンテーション	2	2
5/21(火)-28(火)	徳島大学動画紹介 TikTok プロジェクト	3	3
6/1(土)	英語で学ぶ徳島文化講座・フィールドトリップ *1	1	4
6/4(火)-21(金)	TU-UTeM 英語授業 *3	6	6
6/25(火)	グローバル講演会 *2	1	1
6/27(火)-7/19(金)	文化紹介プレゼンテーション *4	7	7
8/7(水)	サマースクール プレゼン *5	4	4
8月中旬～	海外現地留学、オンライン留学 *6	1	20～80
9/25(水)	修了式・振り返り	1	1
合計			49～109

- *1. 徳島大学教養教育院 Moreton 准教授による文化理解講座。今回は徳島中央公園でのオリエンテーションを行った。
- *2. 今回は、本学総合科学部卒業生である中川雅貴氏にご講演を頂いた。タイトルは「ラトビアと日本の国際交流～音楽を通して～」。
- *3. UTeM (マレーシアマラッカ技術大学 (Universiti Teknikal Malaysia Melaka)) と本学インターナショナル教員による英語集中講座。毎週、火曜、金曜にそれぞれ半数の学生を担当。
- *4. GRIP 学生は、各自が選んだテーマを基にプレゼンテーションの準備を行い、協定校 (LBTU (ラトビア)、ベトナムなど) とのオンライン交流イベント (7月9日(火) 18:00-19:00) を通して海外学生からの意見を聞く。その後、プレゼンテーションの仕上げに取り組み、最終的にサマープログラム (新野キャンパス) で8月7日(水)に同プログラム参加者を対象に最後のプレゼンテーションを行った。

なお、GRIP 学生が選んだトピックは、以下のとおり。

- On Japanese Snacks
- Part-time Job
- Coming of Age Day
- School Uniform
- Japanese Bath

- *5. 参加学生は全員、前述の「海外現地・オンライン留学プログラム」(夏休み) から1つを選択し、参加した。最短のプログラムであるデラールアラネタ大学 (フィリピン) オンラインプログラム (2週間) が約 20 時間 (2 時間×5 日間×2 週間)、その他の海外現地留学が約 80 時間 (4 時間×5 日間×4 週間) の学習時間を提供。



中川氏によるグローバル講演会



サマースクール 文化紹介プレゼン

【第 6 期 GRIP 概要】

- 日程：2024 年 10 月 22 日 (火) ～2025 年 3 月 26 日 (水) (予定)
- 選考：オンライン英語テスト (CASEC) の結果および提出書類をもとに 総合的に判定
- 奨学金：修了学生に対して「支援奨学金」をプログラム参加に係る費用の全額程度支給
- 参加者数：7 人

日付	セッション項目	回数	時間数
10/22 (火)	オリエンテーション、英語学習・国際理解講座	1	1
10/25 (金)	開講式、Global 交流会テーマ決め・準備	1	1
10/29 (火)	オンライン Global 交流会 *1	1	1
11/1 (金)	多文化理解交流会	2	2
11/5 (火)、11/8 (金)	徳島文化 Field Tour 事前講座 *2	2	2
11/9 (土)	徳島文化 Field Tour *2 藍の館、霊山寺・地藏寺、鳴門ドイツ館	1	5
11/12 (火)	Global 講演会 *3	1	1
11/15 (金)	International Day: Let's Enjoy Indian Foods and Learn Indian Culture and Language	1	2
11/16 (土)	Global 企業訪問 (楽天大阪支社) *4	1	5
11/19 (火) -12/6 (金)	TU-UTeM 英語講座 *5	6	6
12/10 (金) -1/10 (火)	文化紹介ポスタープレゼン準備 *6	7	7
1/11 (土)	文化紹介ポスタープレゼン	1	2
2 月～3 月	海外現地留学・オンライン留学 *7	1	20～80

3/26 (水)	修了式・事後指導	1	2
合計			57~117

- *1. 交流協定校とのオンライン交流会を実施した。8月に実施したサマープログラムに参加した UTeM (マレーシア)、UTM (マレーシア)、ハノイ大学 (ベトナム) の学生 (計 8 名) が参加した。
- *2. エアトラベル徳島 (株) モートン氏の協力の下、Field Tour 事前講座を 2 回、実際の Field Tour (約 5 時間) を実施した。Field Tour の詳細については、前述の「徳島県留学生交流推進事業」の項に記載。
- *3. 今回は、協定校ヴェルコ・タルノヴォ大学 (ブルガリア) のマギー教授に協力を頂いた。タイトルは「異文化理解」。
- *4. グローバルに活動を展開している日本企業を視察するために、今年度から実施。初回ということもあり、今回は大阪にある楽天支社を訪問した。
- *5. UTeM (マレーシアマラッカ技術大学) と本学インターナショナルオフィス教員による英語集中講座。前期同様、火曜、金曜にそれぞれ半数の学生を担当。
- *6. 前期同様、グループで日本文化に関するトピックを自らで選び、ポスター発表を行うようにした。協定校 (LBTU (ラトビア)、ザグレブ大学 (クロアチア)) とのオンライン交流イベント (12 月 20 日 (金) 18:00-19:00) を通して海外学生からの意見を聞き、その後プレゼンテーションの仕上げに取り組んだ。
選んだトピックは、

- Japanese Tea Ceremony
- Hinamatsuri
- Onomatopes in Japanese
- Bukatsu in Japan
- Japanese Calligraphy
- Cat Café

であり、これら 6 つのトピックについて本学留学生 (日本語研修コース学生 6 名) を対象に英語で発表を行った。発表後は、英語での質疑応答が活発に行われていた。

- *7. 参加学生は全員、前述の「海外現地・オンライン留学プログラム」(春休み) から 1 つを選択し、参加した。デラールアラネタ大学 (フィリピン) オンラインプログラムが約 20 時間 (2 時間×5 日間×2 週間)、又は約 40 時間 (2 時間×5 日間×4 週間)、その他の海外現地留学が約 80 時間 (4 時間×5 日間×4 週間) の学習時間を提供。



Global 企業訪問 (楽天大阪支社)



文化紹介ポスタープレゼン

GRIP Free Talk Session

昨年同様、GRIP 参加学生が自由に英会話を練習できる Free Talk Session を前後期、毎週月曜～金曜(16:00～19:00) に開催した。開催日数、参加人数は以下のとおり。

【前期】

開催日：2024年4月22日(月)～2024年7月11日(月) 計57日

場所：地域創生・国際交流会館 1F 他言語コモンラウンジ

参加人数(のべ)：合計 785人(学生スタッフ220人、一般学生565人)

【後期】

開催日：2024年10月21日(火)～2025年1月16日(金) 計50日

場所：地域創生・国際交流会館 1F 他言語コモンラウンジ

参加人数(のべ)：合計 548人(学生スタッフ223人、一般学生325人)

官民協働海外留学支援制度～トビタテ！留学 JAPAN～

過去に「トビタテ！留学 JAPAN」に参加した学生と協力して、募集説明会を開催した。また、申請希望学生に対する留学計画相談を受けたり、申請書のサポートを行ったりした。

「トビタテ！留学 JAPAN」 第 17 期

説明会 2024 年 11 月 25 日 オンライン

参加者数 14 人

申請者 4 人

その他の留学支援

海外危機管理オリエンテーション

海外現地留学をする学生と海外留学に関心がある学生や教職員を対象に、2024 年 7 月 8 日（月）と 2025 年 1 月 20 日（月）に海外留学生安全対策協議会（JCSOS）の海外セキュリティアドバイザーを講師として招き海外危機管理オリエンテーションを開催した。海外でトラブルに巻き込まれないための予防策、万一巻き込まれてしまった場合の対処法などについて、海外でのトラブル事例をもとにお話しいただいた。本セミナーは海外留学を予定している本学学生には参加を必須としている。参加できなかった学生は録画された動画を視聴することになっている。



Global Space Josanjima / Kuramoto

常三島・蔵本両キャンパスに「Global Space」を設置している。学生が海外協定校情報や海外留学情報を自由に閲覧できるようになっている。また、海外留学相談や GRIP、外国人留学生と日本人学生との交流、外国人留学生対象の日本語の授業を行う場所としても活用されている。



Global Space Josanjima



Global Space Kuramoto

徳島大学外国人留学生在籍状況

【国別】2025年2月1日時点（単位：人）

区分／国又は地域名		学部学生			大学院生			研究生等			合 計		
		計	女子	国費	計	女子	国費	計	女子	国費	計	女子	国費
アジア	インドネシア	1	1	0	7	5	5				8	6	5
	インド				9	3	2				9	3	2
	台湾				5	1	0	2	1	0	7	2	0
	韓国	18	4	0	2	1	0	1	0	0	21	5	0
	中国	4	2	0	72	27	0	37	15	0	113	44	0
	バングラデシュ				9	0	5				9	0	5
	フィリピン				5	2	1				5	2	1
	ベトナム	2	1	0	11	4	4	1	1	1	14	6	5
	マレーシア	7	1	1	2	1	2				9	2	3
	モンゴル				19	10	3	1	0	0	20	10	3
	ミャンマー							1	1	0	1	1	0
	ネパール							1	0	0	1	0	0
	パキスタン							1	1	1	1	1	1
北米	アメリカ				1	0	0				1	0	0
欧州	スウェーデン							4	0	0	4	0	0
	フランス							3	2	0	3	2	0
	ブルガリア							1	1	0	1	1	0
大洋州	オーストラリア	1	0	1						1	0	1	
アフリカ	エチオピア				1	0	1				1	0	1
	ガーナ							2	0	2	2	0	2
	ケニア							1	0	1	1	0	1
	マダガスカル							1	1	1	1	1	1
	モロッコ							1	0	1	1	0	1
	ウガンダ							1	0	1	1	0	1
合計	24ヶ国・地域	33	9	2	143	54	23	59	23	8	235	86	33

【所属別】（2025年2月1日現在単位：人）

所属/区分	学部学生			大学院生			研究生等			合計		
	計	女性	国費	計	女性	国費	計	女性	国費	計	女性	国費
総合科学部	3	2	0				25	12	0	28	14	0
医学部	1	1	0				4	3	0	5	4	0
歯学部										0	0	0
薬学部	2	0	2							2	0	2
理工学部	23	4	0				14	1	1	37	5	1
生物資源産業学部	4	2	0							4	2	0
創成科学研究科 （地域創成）				21	11	0	3	2	0	24	13	0
創成科学研究科 （臨床心理）				1	1	0				1	1	0
創成科学研究科 （理工）				25	6	0	3	2	0	28	8	0
創成科学研究科 （生物資源）				2	0	0				2	0	0
創成科学研究科 （創成科学）				29	6	3	1	1	1	30	7	4
医学研究科				29	13	6				29	13	6
口腔科学研究科				18	11	6	2	1	0	20	12	6
薬学研究科				6	2	3	1	0	0	7	2	3
医科栄養学研究科				2	1	2				2	1	2
保健科学研究科				6	3	2				6	3	2
総合科学教育部				0	0	0				0	0	0
先端技術科学教育部				4	0	1				4	0	1
高等教育研究センター							6	1	6	6	1	6
合計	33	9	2	143	54	23	59	23	8	235	86	33
2023年度	27	9	2	130	45	23	34	11	3	191	65	28
2022年度	29	10	1	117	43	22	32	13	7	178	66	30
2021年度	30	9	1	122	56	23	18	8	9	170	73	33
2020年度	30	10	0	143	69	19	16	7	8	189	86	27

【徳島大学における過去5年間の留学生受入数】各年度5月1日現在（単位：人）

区分／年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
国費	20	26	23	25	28
政府派遣	0	0	1	1	0
私費	184	154	140	148	177
計	204	180	164	174	205

【短期滞在者数（2023年度）】（単位：人）

期 間	プログラム名	部局	形式	学生数
7月21日～8月2日	サマースクール	総合科学部	対面	5
9月2日～9月23日	学生交流プログラム	歯学部	対面	6
11月6日～11月24日	学生交流プログラム	歯学部	対面	10
2月5日～2月16日	学生交流プログラム	歯学部	対面	3
7月24日～8月11日	サマースクール	創成科学研究科	オンライン	115
2月26日～3月6日	スプリングスクール	創成科学研究科 理工学専攻	対面	19
7月19日～7月26日	サマースクール	高等教育研究 センター	対面	29

学術交流協定校一覧

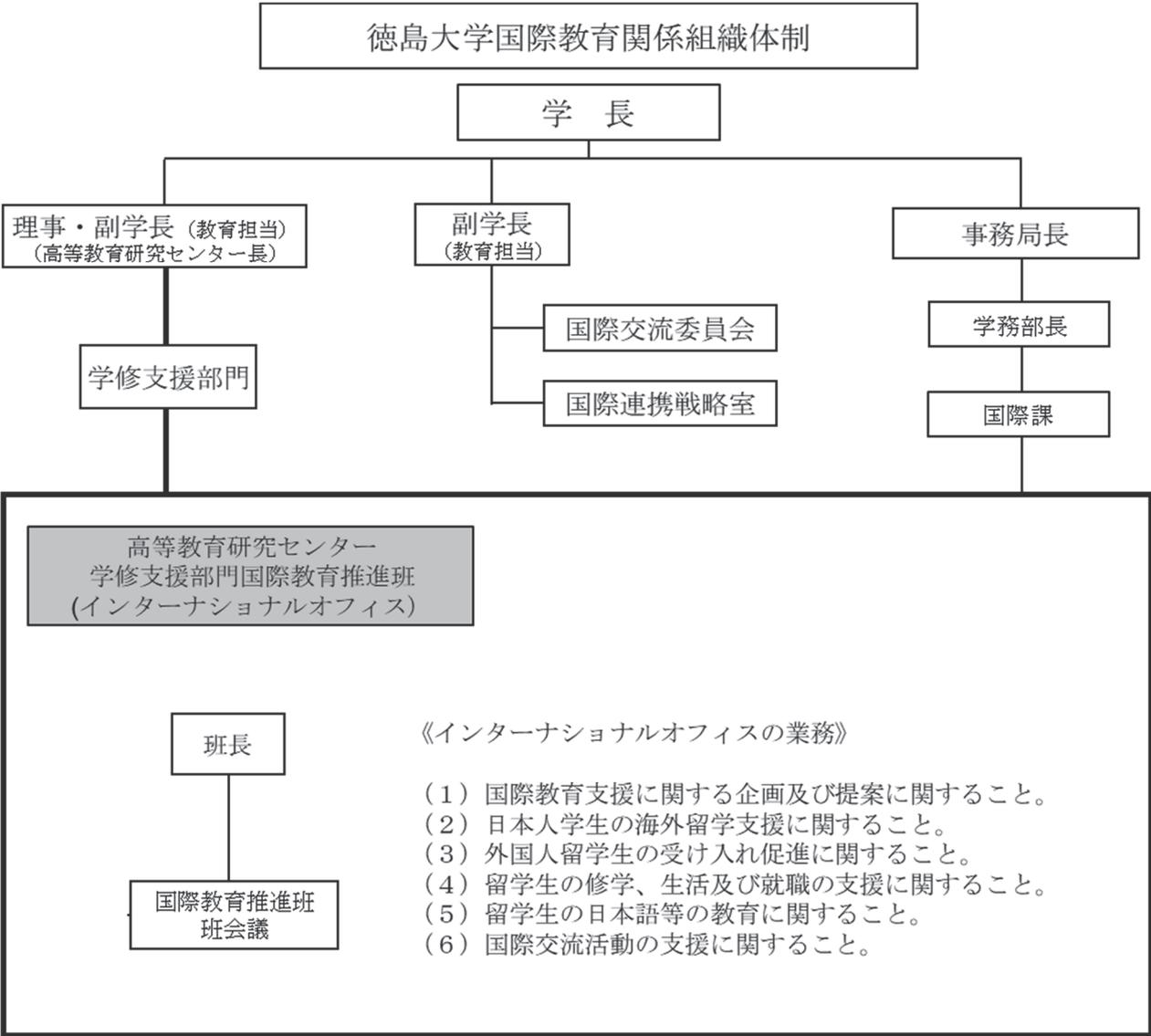
2025年2月1日現在

大学間学術交流協定校（40 大学）			国・地域名
1	オークランド大学	(国立)	ニュージーランド
2	武漢大学	(国立)	中国
3	ガジャマダ大学	(国立)	インドネシア
4	慶北大学	(国立)	韓国
5	韓国海洋大学	(国立)	韓国
6	吉林大学	(国立)	中国
7	テキサス大学ヒューストンヘルスサイエンスセンター	(公立)	アメリカ
8	西安交通大学	(国立)	中国
9	南通大学	(国立)	中国
10	バーゼル大学	(国立)	スイス
11	ゴンダール大学	(国立)	エチオピア
12	モンゴル国立医科大学	(国立)	モンゴル
13	ハノーバー医科大学	(国立)	ドイツ
14	モナシュ大学	(公立)	オーストラリア
15	マレーシアサインズ大学	(国立)	マレーシア
16	ソウル国立大学	(国立)	韓国
17	マレーシア工科大学	(国立)	マレーシア
18	マレーシア国民大学	(国立)	マレーシア
19	マラヤ大学	(国立)	マレーシア
20	国立台湾科技大学	(国立)	台湾
21	マレーシアマラッカ技術大学	(公立)	マレーシア
22	ムハマディア大学ジョグジャカルタ校	(私立)	インドネシア
23	ベトナム国立栄養院	(国立)	ベトナム
24	ベトナム国立農業大学	(国立)	ベトナム
25	キングモンクット工科大学トンブリ校	(国立)	タイ王国
26	ボルドー大学	(国立)	フランス
27	ダナン大学	(国立)	ベトナム
28	南イリノイ大学	(公立)	アメリカ
29	トリニティウエスタン大学	(私立)	カナダ
30	パラナ連邦工科大学	(公立)	ブラジル
31	ミラノ大学	(公立)	イタリア
32	東国大学	(私立)	韓国
33	大連理工大学	(国立)	中国
34	テクニオンーイスラエル工科大学	(国立)	イスラエル
35	レイリア工科学院	(国立)	ポルトガル

36	ヴェリコ・タルノヴォ大学	(公立)	ブルガリア
37	コスタリカ工科大学	(国立)	コスタリカ
38	ハノイ医科大学	(国立)	ベトナム
39	ハノイ大学	(国立)	ベトナム
40	ラジシャヒ大学	(国立)	バングラデシュ
部局間学術交流協定校 (53 大学)			
1	トゥールーズ工科大学	(国立)	フランス
2	朝鮮大学歯科部	(私立)	韓国
3	ラインマイン応用科学大学	(公立)	ドイツ
4	中国医科大学口腔医学院	(国立)	中国
5	ノースカロライナ大学チャペルヒル校エシエルマン薬学部	(公立)	アメリカ
6	南台科技大学工学部	(私立)	台湾
7	大理大学薬学化学院	(公立)	中国
8	上海交通大学医学院附属第九人民医院	(国立)	中国
9	メトロポリア応用科学大学リハビリテーション・医療検査学部	(国立)	フィンランド
10	メトロポリア応用科学大学保健学部	(国立)	フィンランド
11	ルンド大学人文神学部	(国立)	スウェーデン
12	ハントゥアー大学歯学部	(私立)	インドネシア
13	延世大学スペース・バイオサイエンス研究部	(私立)	韓国
14	国立嘉義大学人文芸術学院	(国立)	台湾
15	ドクターババサヘブアンベドカルマラツワダ大学理学部	(公立)	インド
16	フィニステラーエ大学歯学部	(私立)	チリ
17	ビショップス大学	(私立)	カナダ
18	スルタンアグンイスラミック大学歯学部	(私立)	インドネシア
19	ハサヌディン大学歯学部	(国立)	インドネシア
20	ノースマハラシュトラ大学 (理学院群及び技術大学院)	(公立)	インド
21	育達科技大学人文管理学院	(私立)	台湾
22	東亜大学考古美術史学科	(私立)	韓国
23	コロラド大学ボルダー校	(公立)	アメリカ
24	スマトラ・ウタラ大学薬学部	(国立)	インドネシア
25	開南大学人文社会学院	(私立)	台湾
26	プリンスオブソングラ大学看護学部	(公立)	タイ
27	セントポール大学フィリピン	(私立)	フィリピン
28	中国科学院広西植物研究所	(国立)	中国
29	ラトビア大学人文学部	(国立)	ラトビア
30	ブリティッシュコロンビア大学薬学部	(国立)	カナダ
31	ザグレブ大学人文社会科学部	(国立)	クロアチア
32	寧波大学外国語学院	(国立)	中国
33	マハサラスワティ・デンパサール大学歯学部	(私立)	インドネシア

34	モンゴル科学技術大学情報通信技術学部	(国立)	モンゴル
35	ウダヤナ大学	(国立)	インドネシア
36	スリハサナンバ歯科大学	(私立)	インド
37	ゲント大学文学哲学部	(公立)	ベルギー
38	シリマン大学看護学部	(私立)	フィリピン
39	マニパール歯科大学マンガロール校	(私立)	インド
40	SRM 歯科大学	(私立)	インド
41	リュブリャナ大学文学部	(公立)	スロベニア
42	スリパリーロック大学	(公立)	アメリカ
43	ブルノ工科大学中央ヨーロッパ技術研究所 (CEITEC)	(国立)	チェコ
44	淡江大学推広教育室	(私立)	台湾
45	インド国政府科学技術省生物資源持続型開発研究所 (ISBD)	(国立)	インド
46	レーゲンスブルク大学化学薬学部	(公立)	ドイツ
47	ボローニャ大学工業化学科	(公立)	イタリア
48	育達技大学レジャークリエイティビティ学部	(私立)	台湾
49	サベサ医学・技術科学研究所サベサ歯科大学	(私立)	インド
50	高雄医学大学医学院	(私立)	台湾
51	致理科技大学国際貿易外国語学部	(私立)	台湾
52	サウスウェスタン大学歯学部	(私立)	フィリピン
53	同済大学歯学部	(国立)	中国

徳島大学国際教育関係組織体制



徳島大学高等教育研究センター規則

平成31年3月28日
規則第86号制定

(趣旨)

第1条 この規則は、徳島大学学則（昭和33年規則第9号）第4条第2項の規定に基づき、徳島大学高等教育研究センター（以下「センター」という。）について必要な事項を定めるものとする。

(目的)

第2条 センターは、全学的視点から入学者選抜、教育改革、ICT活用教育、創新教育、国際教育、学生生活及びキャリア形成等の支援に関する主要施策を調査研究し、教育支援及び学生支援に係る取組を総合的に推進すること、並びに教育支援、学生支援に係る徳島大学（以下「本学」という。）の実情を調査、分析し、学修成果の把握や教育支援、学生支援に係る提言等を行い、充実・改善を図ることを目的とする。

(部門及び室等)

第3条 前条の目的を達成するため、センターに次の部門及び室等（以下「部門等」という。）を置く。

- (1) アドミッション部門
- (2) 教育改革推進部門
- (3) 学修支援部門
- (4) キャリア支援部門
- (5) 教育の質保証支援室（以下「質保証支援室」という。）

2 ICT活用教育、イノベーション教育及びグローバル教育を推進するため、学修支援部門に EdTech推進班、創新教育推進班及び国際教育推進班を置く。

3 学生のキャリア教育、キャリア形成支援、就職支援及び学生支援を推進するため、キャリア支援部門にキャリア・就職支援班及び学生支援班を置く。

4 第2項の創新教育推進班にイノベーションデザイン担当、イノベーション創成担当及び社会実装担当を、前項の学生支援班に学生生活支援室及び学生参画推進室を置く。

5 前項の担当及び室について必要な事項は、センター長が別に定める。

(部門等の業務)

第4条 アドミッション部門は、次の業務を行う。

- (1) 入学者選抜及び入試広報に係る企画及び提案等に関すること。
- (2) 入学者選抜における調査、分析及び研究に関すること。
- (3) 四国地区国立大学連合アドミッションセンターに関すること。
- (4) その他入学者選抜に関し必要な事項

2 教育改革推進部門は、次の業務を行う。

- (1) 教育改革に係る企画及び提案に関すること。
- (2) 教員の教育力の向上等に関すること。
- (3) 教育改革の企画及び運営への学生の関与に関すること。
- (4) その他教育改革に関し必要な事項

3 学修支援部門は、次の業務を行う。

- (1) EdTechの推進に関すること。
- (2) 創新教育の推進に関すること。
- (3) 国際教育支援の推進に関すること。
- (4) その他学修支援に関し必要な事項

4 キャリア支援部門は、次の業務を行う。

- (1) 学生のキャリア・就職支援に関すること。
- (2) 学生支援に関すること。
- (3) その他学生のキャリア・就職支援に関し必要な事項

5 質保証支援室は、徳島大学インスティトゥーショナル・リサーチ室（第12条において「IR室」という。）と連携・協力して、次の業務を行う。

- (1) 教学データの検証に関する企画及び提案に関すること。
- (2) 学修成果の見える化に関すること。
- (3) 教学データの検証結果に基づく教育の内部質保証、教育改革支援及び学生支援についての提言に関すること。
- (4) 教育組織の意思決定の支援に関すること。
- (5) 入学前教育及び学修成果の把握方法の開発に関すること。
- (6) その他教育の質保証の実施に関し必要な事項

6 前条第1項に定める部門等は、センターの目的を達成するため、連携・協力を努めなければならない。

（班の業務）

第5条 EdTech推進班は、次の業務を行う。

- (1) ICTを活用した教育の企画及び提案に関すること。
- (2) 教員のICTを活用した教育の質向上及び普及に関すること。
- (3) ICTを活用した学生への教育の支援に関すること。
- (4) 四国におけるe-Knowledgeを基盤とした大学間連携による大学教育の共同実施に関すること。
- (5) その他ICTを活用した教育の開発及び支援に関し必要な事項

2 創新教育推進班は、次の業務を行う。

- (1) 創新教育に関する企画及び提案に関すること。
- (2) 創新教育の実施及び教育法の開発に関すること。
- (3) 創新教育の評価方法の開発及び継続的な改善に関すること。
- (4) 創新教育の普及及び学外関係機関との連携に関すること。
- (5) その他創新教育に関し必要な事項

3 国際教育推進班は、次の業務を行う。

- (1) 国際教育支援に関する企画及び提案に関すること。
- (2) 日本人学生の海外留学支援に関すること。
- (3) 外国人留学生（以下「留学生」という。）の受入れ促進に関すること。
- (4) 留学生の修学、生活及び就職の支援に関すること。
- (5) 留学生の日本語等の教育に関すること。
- (6) 国際交流活動の支援に関すること。
- (7) その他国際交流及び国際教育の支援に関し必要な事項

4 キャリア・就職支援班は、次の業務を行う。

- (1) 学生のキャリア形成及び就職に関する企画及び提案に関すること。
- (2) 学生のキャリア形成支援及び就職支援に関すること。
- (3) キャリア教育の支援に関すること。
- (4) その他学生の就職支援及びキャリア形成支援に関し必要な事項

5 学生支援班は、次の業務を行う。

- (1) 学生の課外活動及び自治活動に関すること。
- (2) 学生の経済支援に関すること。
- (3) 学生の指導相談、健康管理及び保健衛生に関すること。
- (4) 学生の表彰等に関すること。
- (5) 学生に対する広報、調査及び統計等に関すること。
- (6) 学生の正課外教育に関すること。
- (7) その他学生支援に関し必要な事項

（職員）

第6条 センターに、次の職員を置く。

- (1) センター長

- (2) 部門長及び教育の質保証支援室長（以下「質保証支援室長」という。）
- (3) 班長
- (4) 専任教員（特任教員を含む。）
- (5) 兼務教員
- (6) その他必要な職員

2 前項の職員のほか、センター長が必要と認める場合は、副センター長を置くことができる。

3 学修支援部門に、創新教育コーディネーター及びものづくりコーディネーターを置くことができる。

4 キャリア支援部門に、就職コーディネーター、キャリアコーディネーター及びキャリアカウンセラーを置くことができる。

（センター長）

第7条 センター長は、学長が指名する副学長又は本学の教授をもって充てる。

2 センター長は、センターの業務を掌理する。

3 センター長の任期は2年とする。ただし、センター長が任期の途中で欠員となった場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

4 センター長は、再任されることができる。

（副センター長）

第8条 副センター長は、本学の教員のうちからセンター長の意見を聴いて、学長が命ずる。

2 副センター長は、センター長の職務を補佐する。

3 副センター長の任期は2年とする。ただし、副センター長が任期の途中で欠員となった場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

4 副センター長は、再任されることができる。

（部門長及び質保証支援室長）

第9条 部門長及び質保証支援室長（以下「部門長等」という。）は、センター長の意見を聴いて、学長が命ずる。

2 部門長等は、所属する部門等の業務を掌理するとともに、センター長の職務を補佐する。

3 部門長等の任期は2年とする。ただし、部門長等が任期の途中で欠員となった場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

4 部門長等は、再任されることができる。

（班長）

第10条 班長は、センター長の意見を聴いて、学長が命ずる。ただし、学生支援班長は徳島大学学生委員会委員長をもって充てる。

2 班長は、班の業務を掌理する。

3 班長の任期は2年とする。ただし、班長が任期の途中で欠員となった場合の後任者の任期は、前任者の在任期間とする。

4 班長は、再任されることができる。

（専任教員）

第11条 専任教員は、センターの運営を補助し、所属する部門等の業務を処理する。

2 専任教員の選考は、第15条に規定する運営委員会の議を経て、学長が行う。

（兼務教員）

第12条 兼務教員は、専任教員と協力し、所属する部門等の業務を処理するとともに、必要に応じて、学部及び大学院研究科との連絡調整を行う。

2 兼務教員は、次の各号に掲げる者をもって充て、学長が命ずる。

(1) アドミッション部門

イ 各学部から選出された教員 各1人

- ロ 教養教育院から選出された教員 1人
- (2) 教育改革推進部門
 - イ 質保証支援室の専任教員
 - ロ その他教育改革推進部門が必要と認める者
- (3) 学修支援部門
 - イ EdTech 推進班
 - (イ) 各学部から選出された教員 各1人
 - (ロ) 教養教育院から選出された教員 1人
 - (ハ) 情報センターから選出された教員 1人
 - ロ 創新教育推進班
 - (イ) 各学部から選出された教員 各1人
 - (ロ) 教養教育院から選出された教員 1人
 - (ハ) 研究支援・産官学連携センターから選出された教員 1人
 - ハ 国際教育推進班
 - 部局から選出された教員 2人
- (4) キャリア支援部門
 - イ キャリア・就職支援班
 - 各学部から選出された教員 各1人
 - ロ 学生支援班
 - (イ) 徳島大学学生委員会規則（平成11年規則第1385号）第3条第2号及び第3号の委員
 - (ロ) 国際教育推進班から選出された教員 1人
 - (ハ) キャンパスライフ健康支援センターから選出された教員 1人
- (5) 質保証支援室
 - イ IR室の教員 1人
 - ロ その他質保証支援室が必要と認める者

3 前項の規定にかかわらず、センターの業務に関し専門知識を有する者で、センター長が必要と認めるときは、学長が命ずるものとする。

4 兼務教員（第2項第4号ロ（イ）の兼務教員を除く。以下この項及び次項において同じ。）の任期は2年とする。ただし、兼務教員が任期の途中で欠員となった場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

5 前項の兼務教員は、再任されることができる。

（創新教育コーディネーター及びものづくりコーディネーター）

第13条 創新教育コーディネーター及びものづくりコーディネーターは、センター長の意見を聴いて、学長が命ずる。

2 創新教育コーディネーターは、創新教育推進班の運営、教員のサポート、事務処理等の業務を行う。

3 ものづくりコーディネーターは、学生の教育研究活動に係る技術支援、学生プロジェクトのマネジメント等の業務を行う。

（就職コーディネーター、キャリアコーディネーター及びキャリアカウンセラー）

第13条の2 就職コーディネーター、キャリアコーディネーター及びキャリアカウンセラーは、センター長の意見を聴いて、学長が命ずる。

2 就職コーディネーターは、学生の就職先企業等の開拓、就職セミナー、就職ガイダンス等の企画・立案・実施及び業界の動向調査等の業務を行うほか、第4項の業務を行う。

3 キャリアコーディネーターは、学生ニーズの収集・分析、キャリア形成セミナー、キャリア形成ガイダンス等の企画・立案・実施及び学内関係部局との連携強化等の業務を行うほか、次項の業務を行う。

4 キャリアカウンセラーは、学生の就職相談及び進路相談業務並びに学生と企業のマッチング支援並びに面接前後の指導等の業務を行う。

(学外者への委嘱)

第14条 センター長が必要と認めるときは、学長の承認を得て、学外者に就職コーディネーター、キャリアコーディネーター又はキャリアカウンセラーを委嘱することができる。

(運営委員会)

第15条 センターに、センターの管理運営及び業務に関する事項を審議するため、徳島大学高等教育研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

第16条 運営委員会は、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) センターの管理運営の基本方針に関する事項
- (2) センターの業務に関する事項
- (3) 教員の人事に関する事項
- (4) センターの予算・決算に関する事項
- (5) その他センターの管理運営及び業務に関し必要と認める事項

第17条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) センター長
- (2) 副センター長
- (3) 部門長等
- (4) 班長
- (5) 各学部から選出された教員 各1人
- (6) 教養教育院から選出された教員 1人
- (7) 学務部長
- (8) その他運営委員会が必要と認める者

2 前項第5号、第6号及び第8号の委員は、学長が命ずる。

3 前項の委員の任期は2年とする。ただし、委員に欠員が生じたときの後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

4 前項の委員は、再任されることができる。

第18条 運営委員会に委員長を置き、前条第1項第1号の委員をもって充てる。

2 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

第19条 運営委員会は、委員の過半数の出席がなければ、会議を開くことができない。

2 議事は、出席した委員の過半数をもって決する。

第20条 運営委員会が必要と認めるときは、会議に委員以外の者の出席を求めて意見を聴くことができる。

(専門委員会)

第21条 運営委員会に、専門委員会を置くことができる。

2 専門委員会について必要な事項は、運営委員会が別に定める。

(連絡会議)

第22条 センターに、センターの部門等に関係する事項について連絡調整するため、徳島大学高等教育研究センター連絡会議（以下「連絡会議」という。）を置く。

2 連絡会議について必要な事項は、センター長が別に定める。

(部門会議、室会議及び班会議)

第23条 部門等の運営に関する事項を審議するため、部門に部門会議を、質保証支援室に室会議を、各班（学生支援班を除く。）班会議を置く。

2 学生支援班の運営に関する事項は、徳島大学学生委員会において審議する。

3 部門会議、室会議及び班会議について必要な事項は、センター長が別に定める。

(四国地区国立大学連携事業)

第24条 四国地区国立大学連携事業を推進するため、センターに「四国地区国立大学連合アドミッションセンター徳島大学サテライトオフィス」（以下「徳島大学サテライトオフィス」という。）及び「大学連携e-Learning教育支援センター四国徳島大学分室」（以下「徳島大学分室」とい

う。)を置く。

2 徳島大学サテライトオフィス及び徳島大学分室の業務は、それぞれアドミッション部門及び学修支援部門 EdTech 推進班が行う。

3 徳島大学サテライトオフィスにアドミッションオフィサーを置き、アドミッション部門の教員をもって充てる。

4 徳島大学分室に分室長を置き、学修支援部門 EdTech 推進班長をもって充てる。

(日本語研修コース)

第25条 留学生に対する日本語等の予備教育を行うため、センターに日本語研修コースを置く。

2 日本語研修コースの実施に関し必要な事項は、別に定める。

(イノベーションプラザ)

第26条 学修支援部門創新教育推進班の業務を行うため、イノベーションプラザを置く。

2 イノベーションプラザについて必要な事項は、センター長が別に定める。

(事務)

第27条 センターの事務は、学務部教育支援課が学務部各課と連携・協力して処理する。

(雑則)

第28条 この規則に定めるもののほか、センターについて必要な事項は、センター長が別に定める。

附 則

1 この規則は、平成31年4月1日から施行する。

2 次に掲げる規則は、廃止する。

(1) 徳島大学総合教育センター規則(平成25年度規則第81号)

(2) 徳島大学創新教育センター規則(平成28年度規則第49号)

3 この規則施行の際、徳島大学総合教育センター規則第8条の規定により任命されているアドミッション部門長及び教育改革推進部門長は、この規則第9条第1項の規定により、それぞれアドミッション部門長及び教育改革推進部門長に任命されたものとみなし、その任期は、同条第3項の規定にかかわらず、平成33年3月31日までとする。

4 この規則施行の際、徳島大学総合教育センター規則第8条の規定により任命されている ICT 活用教育部門長及びキャリア支援部門長は、この規則第10条第1項の規定により、それぞれ EdTech 推進班長及びキャリア・就職支援班長に任命されたものとみなし、その任期は、同条第3項の規定にかかわらず、平成33年3月31日までとする。

5 この規則施行後、最初に任命されるセンター長、副センター長及び兼務教員の任期は、第7条第3項、第8条第3項及び第12条第4項の規定にかかわらず、平成33年3月31日までとする。

6 この規則施行後、最初に任命される第17条第1項第5号、第6条及び第8号の委員の任期は、同条第3項の規定にかかわらず、平成33年3月31日までとする。

附 則(令和2年3月17日規則第64号改正)

1 この規則は、令和2年4月1日から施行する。

2 次に掲げる規則は、廃止する。

(1) 徳島大学国際センター規則(平成14年規則第1703号)

(2) 徳島大学国際センター運営委員会規則(平成14年規則第1704号)

附 則(令和4年3月30日規則第81号改正)

この規則は、令和4年4月1日から施行する。

徳島大学高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班会議規則

平成31年4月1日
高等教育研究センター長制定

(趣旨)

第1条 この規則は、徳島大学高等教育研究センター規則（平成30年度規則第86号）第23条第3項の規定に基づき、徳島大学高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班会議（以下「班会議」という。）について必要な事項を定めるものとする。

(所掌事項)

第2条 班会議は、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) 国際教育支援に関する企画及び提案に関すること。
- (2) 日本人学生の海外留学支援に関すること。
- (3) 外国人留学生（以下「留学生」という。）の受入れ促進に関すること。
- (4) 留学生の修学、生活及び就職の支援に関すること。
- (5) 留学生の日本語等の教育に関すること。
- (6) 国際交流活動の支援に関すること。
- (7) その他国際交流及び国際教育の支援に関し必要な事項

(組織)

第3条 班会議は、次の各号に掲げる者をもって組織する。

- (1) 班長
- (2) 専任教員（特任教員を含む。）
- (3) 兼務教員
- (4) 学務部国際課長
- (5) その他班会議が必要と認める者

(議長)

第4条 班長は、班会議を招集し、その議長となる。

2 議長に事故があるときは、議長があらかじめ指名する者が、その職務を代理する。

(会議)

第5条 班会議は、構成員の3分の2以上の出席がなければ会議を開くことができない。

2 事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(代理出席)

第6条 3条第3号及び4号の委員が会議に出席できないときは、代理の者を出席させることができる。

(構成員以外の者の出席)

第7条 班会議が必要と認めるときは、会議に構成員以外の者の出席を求めて意見を聴くことができる。

(専門部会)

第8条 班会議に、専門部会を置くことができる。

2 専門部会について必要な事項は、班会議が別に定める。

(庶務)

第9条 班会議の庶務は、学務部国際課において処理する。

(雑則)

第10条 この規則に定めるもののほか、班会議について必要な事項は、学修支援部門長が別に定める。

附則

この規則は、平成31年4月1日から施行する。附 則（令和2年3月10日改正）

この規則は、令和2年4月1日から施行する。

附 則（令和5年3月24日改正）

この規則は、令和5年4月1日から施行する。

徳島大学高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班運営スタッフ 会議に関する申合せ

令和2年4月1日
高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班長裁定

(所掌事項)

第1 徳島大学高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班運営スタッフ会議（以下「スタッフ会議」という。）は、徳島大学高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班（以下「班」という。）の業務及び運営について必要な事項（班会議の所掌事項を除く。）を審議する。

(組織)

第2 スタッフ会議は、次の各号に掲げる者をもって組織する。

- (1) 班長
- (2) 班の教員
- (3) 学務部国際課の事務職員のうち係長以上の職にある者
- (4) その他スタッフ会議が必要と認める者

2前項第4号の委員の任期は1年とし、再任されることができる。

(議長)

第3 スタッフ会議に議長を置き、班長をもって充てる。班長は、必要に応じてあらかじめ指名した者に議長の職務を代行させることができる。

(会議)

第4 スタッフ会議は、構成員の過半数の出席がなければ会議を開くことができない。

2議事は、出席した構成員全員の同意をもって決する。

(構成員以外の者の出席)

第5 スタッフ会議が必要と認めるときは、会議に構成員以外の者の出席を求めて意見を聴くことができる。

(庶務)

第6 スタッフ会議の庶務は、学務部国際課において処理する。

(雑則)

第7 この申合せに定めるもののほか、スタッフ会議について必要な事項は、スタッフ会議が別に定める。

附則

この申合せは、令和2年4月1日から実施する。

徳島大学高等教育研究センター日本語研修コース規則

平成31年4月1日
高等教育研究センター長制定

(趣旨)

第1条 この規則は、徳島大学高等教育研究センター規則（平成30年度規則第86号）第25条第2項の規定に基づき、外国人留学生で日本語能力の不十分なものに対し日本語等の予備教育を行うために開設する徳島大学高等教育研究センター日本語研修コース（以下「日本語研修コース」という。）の実施について必要な事項を定めるものとする。

(受講資格)

第2条 日本語研修コースを受講することができる者は、次の各号のいずれかに該当する者とする。

- (1) 国費外国人留学生制度実施要項（昭和29年3月31日文部大臣裁定）に定める研究留学生及び教員研修留学生のうち、日本語等の予備教育が必要であると認められた者
- (2) 日韓共同理工系学部留学生事業実施要項（平成12年8月1日文部省学術国際局長裁定）に定める日韓共同理工系学部留学生のうち、日本語等の予備教育が必要であると認められた者
- (3) 徳島大学学則（昭和33年規則第9号）第49条第2項の規定に基づく日本語等予備教育生
- (4) その他外国人留学生で徳島大学高等教育研究センター長（以下「センター長」という。）が適当と認めた者

(受講の許可)

第3条 センター長は、日本語研修コースを受講しようとする者について、徳島大学高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班会議（以下「班会議」という。）の議を経て、受講を許可する。

(教育期間及び開始時期)

第4条 日本語研修コースの教育期間は6か月とし、その開始時期は4月及び10月とする。

(教育課程)

第5条 日本語研修コースの教育課程は、班会議の議を経て、センター長が別に定める。

(受講の中止)

第6条 日本語研修コースを受講する者（以下「受講者」という。）が受講を中止しようとするときは、その理由を付して、センター長に願い出なければならない。

- 2 前項の願い出があったときは、センター長は、班会議の議を経て、これを許可する。
- 3 センター長は、受講者が疾病その他の理由により受講を継続することができないと認めたときは、班会議の議を経て、受講の中止を命ずることができる。

(修了証書の授与)

第7条 センター長は、日本語研修コースの教育課程を修了した者に対して、修了証書を授与する。

(受講料)

第8条 受講者については、受講料を徴収しない。

(雑則)

第9条 この規則に定めるもののほか、日本語研修コースの実施について必要な事項は、班会議の議を経て、センター長が別に定める。

附則

この規則は、平成31年4月1日から施行する。

高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班・国際課人員名簿

(2025年2月1日時点)

高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班教員

橋本 智	班長（併）教授
金 成梅	教授
坂田 浩	准教授
藤原 由紀子	准教授
Tran Hoang Nam	准教授
村上 敬一	センター兼務教員 教授（総合科学部）
安澤 幹人	センター兼務教員 教授（理工学部）

国際課職員

課長	真名野 佳代
副課長	根ヶ山 須美子
係長	喜多 宏子
係長	川人 公美
主任	山中 利恵
事務員	古城 浩子
事務員	竹内 光恵
特任事務員	堀古 恭子
事務補佐員	住本 直子
事務補佐員	石井 詔子
事務補佐員（蔵本地区）	吉成 記子
事務補佐員	安藝 紀子
事務補佐員	大塚 綾子
事務補佐員（国際交流会館）	田村 真子

2024 度

徳島大学高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班紀要・年報

編集発行： 徳島大学高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班
徳島県徳島市南常三島町 1-1
徳島大学地域創生・国際交流会館 4 階
088-656-7491
<https://www.isc.tokushima-u.ac.jp>

発行日： 2025 年 3 月 31 日